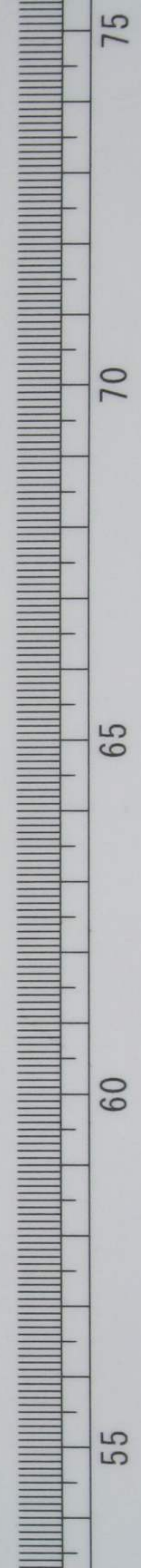


國歌新論 完

哲學書院發行

文學博士(日本)末松謙澄著  
法學博士(英國)

本間文庫  
文庫 14  
D 63







文庫14  
D63



此の肖像を得たり其文を讀み其人を知る  
是れ亦世の中の一興力也寫して以て世に傳ふ  
院主人識

14  
3

二十年前の青萍博士



偶々此舊影を得たり其文を読み其人を見る  
蓋し亦雅中の一興乃ち寫して以て茲に附す  
哲學書院主人識

國歌新論

緒言

一此論は本年一月上旬より二月中旬に至るまで回を追ひ讀賣新聞紙上に掲載したるものにして末の四回は京都市行中に稿する所に係る今哲學書院主人の請に因り魯魚の誤を正し若干の潤飾を施し加ふるに詩歌問答十則、答松永松齡君、再答松永松齡君の三書を以てし編して一書とし書名を國歌新論と命じ以て印刷に付せしむ

一此論、元與謝野寬氏に答ふる爲めに作る所、因て全氏の論文を卷末に附す

明治丁酉四月

青萍迂人受郷識

國歌新論

末松謙澄著



(其一)

新年初刊の太陽に載する所の予の談話は予が匆卒の口授を太陽記者の筆記せしものにて文字の錯誤等勘らず例へば興謝野君が引用せる「道歌」云々の如き予は心學道話類に見る所の和歌の意にて「道話歌」と云ひしあり其他推して知るべし然れども大體の趣意に於ては固より大差なし而して和歌論の部分に關し君は數日來の讀賣新聞中に於て予の所論を駁し予を以て誣妄の詭論を爲せる如くに評せらるゝも予は眞に予の所見を述べたる



ものにて毫も誣妄の意あるに非らず是を以て茲に更に  
前趣意を擴充して廣く和歌の盛衰短長を論述し江湖識  
者の論評を促し併せて與謝野君の疑問に答へんとす意  
ふに予未だ與謝野君其人と一面の識あらざるも亦蓋し  
予と所見を同くする所ありて特に予を激して此論を發  
せしむるものに非らざるを得んや否らざれば其言焉ん  
ぞ如此の短刀直入の姿勢を學ばんや果して然らば予の  
此論を草する亦其故なきに非ざるなり  
我家の小園如何に泉石花卉を安排するも豈馬を曠野に立  
て深山大澤を指顧するの壯觀あらんや如何に百新駒の美  
形を羅列するも豈一團洲の絶技に近邇するを得んや之を  
支那詩に見るに之を本朝にしては百竹外の二十八字鈔あ

るも到底山陽佛山旭庄の壘を望む能はず之を支那にして  
は百眞山民詩集あるも豈東坡の片影に髣髴たるを得んや  
況んや盛唐の諸大家に於てをや予を以て之を見れば我中  
世以降の和歌は如何に其秀逸を抜くも到底園中の小景新  
駒の美形竹外眞山民の小器局を脱出すること能はざるか  
り試に見よ後世富士を詠するもの多し而して春海の  
心あてに見し白雲は麓にて  
思はぬ空に晴るゝ富士の峯  
景樹の  
群山の高根々々を傳ひ來て  
富士の裾野にかゝる白雲  
は世人が稱して絶唱とするものに非らずや然れども之を



萬葉中の無名氏の

あまよみの甲斐の國、打よする、駿河の國と、こちどちの國  
の真中ゆ、出立てる、富士の高嶺は、天雲も、いゆきはかり、  
飛ぶ鳥も、飛びも上らず、もゆる火を、雪もて消ち、降る雪を  
火もて消ちつゝ、言ひも得ず、名けも知らず、あやしくも、い  
ます神かも、石花海と、名けてあるも、うの山の、つゝめる海  
ぞ、ふじ河と、人の渡るも、その山の、水のたぎちぞ、日の本の、  
大和の國の、鎮めども、います神かも、寶ども、成れる山かも、  
駿河ある、不盡の高根は、見れど飽ぬかも、

反歌

不盡の嶺に、ふりおける雪は、六月の、  
望に消ぬれば、その夜ふりけり、

に比せば氣局の廣狹、詞藻の高低、辭氣の強弱、能く日を同く  
して語るべきや、是れ以て一隅を擧げて三隅を知るべきの  
好例證なり、短篇にして卑近の思想を述べたるものにて、も  
萬葉中の豊前娘子の

夕闇は、路たづし、月まちて、  
いませ我背子、その間にも見ん、

又同じく某の

足引の、山より出る、月まつと、  
人には、いひて、妹まつ我を、

の如き後世千百の戀歌、能く之と馳駈することを得るもの  
ありや否や  
之を要するに我日本帝國は詩國として、は藤原朝、奈良朝に

於て大にして其後は次第に沈淪し纒に其面影の一邊を留  
ひるのみ明治昭代の今日に至るも猶未だ見るべきの刷新  
あきを奈何せん

附言 不盡歌中石花海と書し「せのうみ」と訓せるは石花  
は二三月頃石に着ひて生し紫花を結ぶものにて和名「せ  
と云ふに因る三代實録には刻海と書けり是れは古昔山  
間あひだに在りし大池にて後ち噴火の爲め埋没せしよし註解  
に見ゆ此歌は予を以て之を見れば反て赤人の不盡歌に  
一籌を勝つ古本には笠金村とあるも今本には無名なり  
併し赤人の作の次に相併びて出で其體裁も着想も頗る  
相似且つ此に「天雲もいゆきはかり」とあり彼に「白雲も  
いゆきはかり」とありて文句すら同一あれば或は赤人

の別作にして偶々姓氏の脱せしにはあらざる歟

(其二)

我日本帝國は詩國として藤原朝奈良朝に大ありしこと  
は前回に之を論せり以下數回に於ては其何故に大ありし  
かを仍詳細に例示し而して後に徐に方今歌學の地位と將  
來の指針とに論及せん  
聖武帝酒を節度使等に賜ふ御製に曰く  
食國の遠の御庭に汝等が斯くまかりあば平らけく朕は  
遊ばん垂拱て朕はいまさんすめらわがうづの御手もて  
かき撫ふねぎたまふうちあでぞねぎたまふ還らん日相  
飲まん酒ぞこの豊御酒は

反歌

丈夫の、行くどふ道ぞ、おほるかに、  
思ひて行く、あ、丈夫の伴、

典麗莊重、威あり恩あり之を雅頌饗宴の詩の上乗あるもの  
に比するも優るありて劣るなし御製は申すも畏れをも  
後世官禁に侍御する歌臣の詠草、其風神辭藻果して能く之  
に髮鬘たるものありや否や赤人の芳野離宮の應製に曰く  
八隅し、我大君の見し給ふ、芳野の宮は、山高み、雲ぞ棚引  
く、河速み、湍の音ぞ清き、神さびて、見ればたそく、よろし  
なへ、見ればさやけし、此山の、つさばのみこそ、此河の、絶  
ばのみこそ、百敷の大宮所、止む時、もあらめ、  
此歌は前の御製に及ばずと雖も、之れを後世歌人の詠進歌  
あとのいつも、松が青くて目出たい鶴が舞つて目出た

いと千篇一律、様によりて胡虚を畫き一の新思想、あく一の  
奇警語、あきものと豈同、極中の物、あらんや  
軍陣武勇に關して支那詩に悲哀痛歎のもの多きも、快活激  
昂の名作、少きと齊く、我和歌にも、軍陣武勇の、壯快は、甚だ、其  
類に、置しと雖も、万葉中、猶、往々、之を見ることが、得べし、例へ  
ば、高市皇子、殞宮の時、人丸の歌、中の  
……鳥が啼く、東の國の、御軍を、めし、給ひて、千磐、破る、人  
を、和爲と、まつろはぬ、國を、拂へど、皇子、あがら、任けたまへ  
ば、大御身に、太刀取、帶し、大御手に、弓取、持し、御軍を、あども  
ひたまひ、ととのふる、鼓の音は、雷の聲を、聞くまで、吹寄せ  
る、小角の音も、敵見たる、虎が、吼ると、諸人の、おびゆるまで  
に、さうげたる、幡の、あびさは、冬も、り、春さ、り來れば、野毎

に、つきてある火の、風のむた、靡ける如く、取りもてる、弓筈  
のさわぎ、み雪ふる、冬の林に、嵐かも、い巻き渡ると、思ふま  
で、聞のかしこく、引放つ、箭のしげとく、大雪の亂れて來れ、  
まつるはず、立向ひしも、露霜の、消さば消ぬべく、ゆく鳥の

の一段の如き勇士の名を振ふを慕ふ家持の歌の

ちよの實の、父のみこと、はるそばの、母のみこと、おほるか  
に、心盡して、思ふらん、其子かれやも、丈夫や、空しくあるべ  
き、梓弓、未ふり起し、投矢持ち、千尋射度し、劍太刀、腰に取り  
帶き、足引の、八峯踏越ぬ、さしまくる、心さやらず、後の世の  
語り續ぐべく、名をし立つべしも

反歌

丈夫は、名をしたつべし、後の世に、

の如き亦其音鏘鏘として聞くべきものあるあり

(其三)

悲哀の情感を寫すは和歌和文の最長所なり而して是亦萬  
葉時代は殆んど其上界に達せり人丸の悼亡の作に曰く  
打蟬と、思ひし時に、手携て、わが二人見し、走出の、隄に立て  
る、槻木の、こちこちの枝の、春の葉の、しげきが如く、念へり  
し、妹にはあれど、頼めりし、兒等にはあれど、世の中を、背さ  
し得ねば、蜻火の、焼る荒野に、白妙の、天領巾、隠り、鳥と物、朝  
立いまして、入日なす、隠れにしかば、吾妹子が、形見に置け  
る、嬰兒の、こひ泣く毎に、取り與ふ、物し無ければ、男と物、腋

十二  
扱み持ち、吾妹子と、二人わが寐し、枕付く、嬌屋の内、晝は  
も、うらさび暗し、夜はも、氣づき明し、歎けども、せんすべ知  
らに、戀ふれども、逢ふよしを無み、大鳥の、羽際の山に、わが  
戀ふる、妹はいますと、人の云へば、岩根さくみて、あづみ來  
し、よけくもぞ無き、打蟬と、念ひし妹が、蜻火の、ほのかにだ  
にも、見ぬ思へば、

亡妻を念ひ、嬰兒を悲み、偕樂の往日を追懐するの至情行間  
に、躍々たり、高橋朝臣の悼亡に亦曰く

白細の袖さしかへて、靡き寐し、わが黒髪の、眞白髪になら  
んきはみ、新ら世に、共に有らんと、玉の緒の、絶ぬじ、いと妹と、  
結びてし、ことは果さず、思へりし、心は遂げず、白妙の、袂を  
わかれ、にさびにし、家ゆも出て、嬰兒の、泣くをも置きて、朝

霧に、ほのになりつゝ、山城の、相樂山の、山の際に、往きすぎ  
ぬれば、言へすべ、せんすべしらに、吾妹子と、小寐し、妻屋に、  
朝には、出で立ちしぬび、夕には、入り居あけかひ、わさばさ  
む、兒の啼く毎に、をのこじもの、負ひみ抱き、朝鳥の、音の  
み泣きつゝ、戀ふれども、効をのみと、言問はぬ、ものにはあ  
れど、吾妹子が入りにし山を、よすがとぞ思ふ

是れ前者と風韻、髣髴、思想、筆力互に、光彩、相映、帶す所謂、異曲  
同工と謂ふべきものか、而して後世の作者は、千百の追悼歌  
あるも、杳として及ぶ能はざるあり、此等の類似の題目にて

田邊福麻呂が、足柄山に、死人を見るに曰く  
小垣内の、麻を干しけん、妻名根が、作り着せけん、白細の、紐  
をも解かず、一重結、帯を三重結ひ、苦しさに、仕へまつり

て、今だにも、國にまかりて、父母も、妻をも見んと、思ひつゝ、  
 行きけん君は、鳥が啼く、東の國の、かしこきや、神の御坂に、  
 にぎたへの、衣、寒らに、鳥玉の、髪は亂れて、國問へど、國をも  
 告らず、家問へど、家をも云はず、益、荒夫の、行きの進みに、こ  
 うに來やせる、  
 又是と稍、似たる、意想にて、人丸が、讚岐、狹岑、島にて、死人を見  
 るに曰く、

玉藻よし、讚岐國は、國柄か、見れども、飽かぬ、神柄か、幾許貴  
 き、天地、日月と、共に、たり、行かん、神の御面ど、次ぎて、來る、中  
 の、港ゆ、船浮て、わが、漕ぎ來れば、時つ、風、雲井に、吹くに、沖見  
 れば、しき浪立ち、へた見れば、白浪さわぐ、いささどり、海を  
 かしこみ、行く船の、梶引折りて、をち、ちの、島は、多けど、あ

ぐはし、さみの島の、荒磯面に、いほりて見れば、浪の音の、し  
 げき濱邊を、敷妙の、枕になして、荒床に、ころぶす君が、家知  
 らば、行きてもつげん、妻知らば、來も問はましを、玉鐙の、道  
 だに知らず、をほしく、待ちか戀ふらん、愛しき妻等は、

反歌

沖津波、きよる荒磯を、しき妙の、  
 枕どまきて、おせる君かも、

後者は、前者に比すれば、前置は、長きに過ぎ、要点は、短きに過  
 ぎて、何と無く、氣拔する心地するに、拘はらず、両者とも、同類  
 愛憐の、情感は、微妙に描寫せらるゝを見る、後世果して、如斯  
 結構のものありや

(其 四)

山上憶良の貧窮問答に曰く

風交り雨降る夜の雨交り雪降る夜はすべも無く寒くし  
われば堅塩を取りすすろひ糟湯酒打すすろひてしはぶ  
かひ鼻びしびしにしかどあらぬ鬚搔撫て吾を捨て人は  
あらじと誇るへど寒くしあれば麻被引かくぶり布肩衣  
有のことでと着添へども寒き夜すらを我よりも貧き人  
の父母は飢寒からん妻兒どもは乞ひて泣くらん此時は  
如何にしつゝか汝が世は度る  
天地は廣しといへど吾が爲めは狭くやありぬる日月は  
明しといへど吾が爲めは照りや賜はぬ人皆か吾のみや  
然るわくらばに人とは有るを人並に吾もなれるを綿も  
あき布肩衣の海松のごとつゞけ下れるか布のみ肩に

打懸け伏盧の曲いほの内に直土に藁解布て父母は枕の  
かたに妻子どもはあとのべにかくみゐてうれへさまよ  
ひかまごには烟吹立てずこしきには蛛の巢かきて飯炊  
くこども忘れてぬぬ鳥ののどよひ居るにいとどきて短  
き物を端切るといへるが如く答取る里長が聲は閨戸ま  
で來立呼ばひぬかくばかりすべあきものか世の中の道  
貧窮失意の状を描出し盡して餘蘊なし野鄙に渉らずして  
而して陋巷貧士の窮境を叙すること如此に至りては其手  
腕眞に魁偉と云ふの外なし後世詞人善く其萬一を摸し得  
る者ありや又同じく憶良の世間住み難きを悲むに曰く  
世の中のすべなきものは年月はながるゝ如しとりつゞ  
き追ひ來るものは百種に攻より來る乙女等がをどめさ

びすと、韓玉を、袂に巻し、同年兒等と、手携はりて、遊びけむ、  
時の盛りを、止みかね、過し、やりつれ、みなのわた、か黒き髪  
に、何時の間か、霜の降りけむ、紅の、面の上に、何所ゆか、斂搔  
垂りし、益良雄の、男さびすと、劔大刀、腰に取りはき、幸弓を、  
手握り持ちて、赤駒に、下鞍打置き、はひ乗りて、遊び歩さし、  
世の中や、常にありける、乙女等が、さあす板戸を、推開き、い  
たどりよりて、眞玉手の、玉手さしかへ、小寝し夜の、幾許も  
あらねば、手束杖、腰にたがねて、かく行けば、人に厭はぬ、か  
く行けば、人に憎まぬ、およしをば、かくのみあらし、たまさ  
はる、命惜けど、せんすべも無し  
是れ紅顔變じ易く、老境忽ち至るの、状を詠じたるものなり  
是亦其風姿前首と、髣髴たり、家持亦世間常あきを、悲みて曰

天地の、遠き始めよ、世の中は、常あきものと、語りつぎ、春が  
らへ來たれ、天の原、ありさけ見れば、照る月も、盈虚しけり、  
足引の、山の木末も、春されば、花咲にほひ、秋づけば、露霜お  
ひて、風まじり、紅葉散りけり、空蟬も、かくのみならし、くれ  
あゝの、色もうつろひ、鳥玉の、黒髪變り、朝の咲み、夕かはら  
ひ、吹風の、見ぬが如く、逝水の、止まらぬ如く、常もなく、う  
つろふ見れば、にはたづみ、流るゝ涙止めかねつも  
凡そ此類の、作皆能く、人間の、至情を、詩情的に、描寫したるも  
のにして、我王朝文學の、進歩は、人をして、激賞已む能はざら  
しむること、決して、尠少ならざるなり

(其五)



廢都の荒草に懐古の涙を濺ぐもの亦萬葉時代に於て頗る  
 其妙境に入り人丸の近江荒都を過ぐるに曰く  
 玉櫛、畝火の山の、檀原の、聖の御世に、存ませる、神のことと  
 と、樛木の、いや次々に、天の下、知しめしとを、空に見つ、大和  
 をおきて、あをによし、奈良山を超越、いかさまに、思ほしめ  
 せか、天離る、鄙にはあれど、石走の、淡海の國の、樂浪の、大津  
 の宮に、天の下、知ろし召しけん、すめるぎの、神の命の、大宮  
 は、此處と聞けども、大殿は、此處と云へども、春草の、茂く生  
 たる、霞立つ、春日の霧れる、百瑣城の、大宮處、見れば悲しも、  
 前置の動もすれば過長にして反て蕪雜に陥ることあるは  
 人丸の一瑾瑕にして此歌も亦其一たるを免れずと雖も後  
 半の如きは思想語法共に雙絶と謂ふべく國風の彼黍雜々

も殆んど三舍を避けんとす後世果して此類の手腕を振へ  
 る者ありや無名氏の三香原の荒墟を傷むに曰く  
 三香の原、久邇の京は、山高み、河の瀬清み、ありよしと、人は  
 いへども、ありよしと、吾は思へど、古にし、里にしあれば、國  
 見れど、人も通はず、里見れば、家も荒れたり、はしけやし、斯  
 くありけるか、三諸著く、鹿脊山の間、開く花の色、めづら  
 しく、百鳥の、聲あつかしく、在が欲し、住よき里の、荒らく惜  
 しも、  
 此作固より前首に匹敵すること能はざるも亦自ら今人の  
 及ばざる氣韻ありて低回憑吊に堪へざるの状を見る凡そ  
 此類は皆凄愴荒涼の境遇を寫したるもの奇りと雖も萬葉  
 時代の地形眺望に關する詩情は亦時に甚だ快活舒暢のも

のあるを見るか、無名氏の久邇新京を讚するに曰く

我大君神の尊の、高知らず、布當の宮は、百樹あす、山は木高し。落たぎつ、湍の音も清し、鶯の來鳴く春邊は、巖には山下光り、錦あす、花咲きをより、左牡鹿の、妻呼ぶ秋は、天ざらふ、時雨をいたみ、さにづらふ、紅葉散りつゝ、八千年に、おれつがしつゝ、天の下、知らしめさんと、百代にも、易るべからぬ、大宮處

反歌

泉川、往瀬の水の、絶ねばこそ、

大宮處、うつろひゆかめ、

同く無名氏の筑波に登るに曰く

草枕旅の憂を、なぐさもる、こともあらんと、筑波嶺に、登り

て、見れば、尾花散る、雫の田居に、雁金も、寒く來鳴ぬ、新治の

鳥羽の、淡海も、秋風に、白浪立ちぬ、筑波嶺の、好けくを見れ

ば、長き氣に、思ひ積み來し、憂はやみぬ、

前首は、能く新帝京の清景を、寫し兼て、聖代の隆盛を、祈るの

頌意は、紙上に、溢る之を、駱賓王の帝京篇に、比するに、綺巧及

ば、ずと、雖も、其眞率簡鍊は、反て之に、過ぐ、後首は、能く、登臨の

静致を、寫し兼て、積鬱雲散の、快状を、簡潔に、叙し、去りて、遺憾

なし之を、岑參の、慈恩寺浮圖に、登るに、比するに、一氣呵成の

腕力、反て、一頓地を、出るを、覺ゆ、後世の、作家、果して、此類の、落

想ありや、否や

萬葉時代は、又能く、父子の、愛情を、描くに、長ず、石上乙麻呂、卿

土佐に、配流せらるゝ、時の

父君に、吾は眞名子ぞ、母刀自に、吾は愛兒ぞ、參登る、八十氏人の、手向すと、かしこの坂に、幣奉り、吾はぞ追へる、遠き土佐路を、

の如き山上憶良の子等を思ふに

瓜食めば、子ども思ほゆ、栗食めば、まして忍ばゆ、いづくより、來りしものぞ、目かかひに、もとなかゝりて、安寝しあさぬ、

の如き眞摯の情掬すべきを覺ゆるなり後世の彫琢粉節を是れ事とするもの能く此等の着想を夢想し得るや否や

(其 六)

男女相愛の情を詠ずるは歴代の和歌の均しく無限の思想を傾注せる所にして萬葉時代には特に相聞の類を設け

其後の歴代集にも戀の類を設けて纂集せる位にして隨分如何はしき着想までも歌語を以て之を遣れば人毫も之を咎めず作家が有せし自由行動の境界は實に廣汎ありと謂ふべし其何故に斯如かりしかの歴史的觀察と其利害得失の論は姑く之を他日に譲るべしと雖も彼れが如きの自由行動の境界を有し彼れが如きの思想を傾注せし以上は隨分に妙什佳篇も出づべかりし筈なるも割合に名作に乏しきは殆んど怪むべきに足る但短篇には其範圍に相當する程度内に於ては其れ相應に見るべき傑作なきにあらざるも稍錯綜したる思想を描出したるものは萬葉時代に於ても他の種類の諸作と連鎖追逐し得るもの無し中に就き鉄中の鏘々たるものなきに非らず無名氏の古挽歌の(此歌

は挽歌のことあれば素より純然たる戀歌にはあらざるも亦其一種に外ならずと知るべし

夕されば、蘆邊に、騒ぎ明くれば、沖にあづさふ、鳴すらも、妻とたぐひて、我尾には、霜か降りそと、白妙の、羽さしかへて打ちあらひ、小寝とふものを、行く水の、歸らぬ如く、吹く風の、見ぬぬが如く、迹もあき、世の人に、して、別れにし、妹が着せてし、馴れ衣、袖かたしきて、獨りかもねん、

の如き大伴家持の坂上大嬢に贈るの  
痛み痛み、物を思へば、言はんすべ、せんすべもなし、妹と吾手携はりて、朝には庭に出でたち、夕には、床打ち拂ひ、白妙の袖さしかへて、小寝し夜や、常にありける、足引の、山鳥こそは、峯向に、妻問ひすとへ、空蟬の、人ある我や、何すとか、一日

一夜も、離り居て、歎き戀ふらん、こゝもへば、胸こそ痛め、そこ故に、心あぐやと、高圓の、山にも野にも、打ち行きて、遊ばひ行けど、花のみ、にほひてあれば、見ることに、まして思ほゆ、いかにして、忘れんものぞ、戀とふものを、

反歌

高圓の、野邊の顔花、面影に、  
見ぬつゝ妹は、忘れかねつも、

の如き又無名氏の

我妹子は、待てど来まさず、天の原ふりさけ見れば、烏玉の、夜も深けにけり、小夜ふけて荒風の吹けば、立ちどまり、わが待つ袖に、降る雪は、凍り度りぬ、今更に、君来まさめや、さあ葛、後も逢はんと、慰むる、心を持ちて、三袖もち、床打はら

ひ、現には、君には逢ず、夢にだに、逢ふと見ゆこそ、天の足り  
 夜に、  
 の如きは是れなり後世作家の落筆未だ能く此に至るものあ  
 るを聞かざるあり同く無名氏の  
 百足らず、山田の道を、浪雲の、うつくし妻と、言とはず、別れ  
 し來れば速川の、往くも知らに、衣手の、反るも知らに、馬じ  
 物、立ちて爪づき、せんすべの、田付を知らに、物部の、八十の  
 心を、天地に、思ひ足はし、玉あはし、君來ますやと、わが歎く、  
 やさかの、歎き、玉銚の、道來る人の、立ちどまり、如何にと問  
 はし、答へやる、田付を知らに、さにつらふ、君が名言は、色  
 に、出て人知りぬべし、足引の、山より出る、月待つと、人には  
 云ひて、君待つ吾を、

は解者の説に前半は男子の口氣に、後半は女子の口氣に似  
 たれば蓋し二長歌の混合せしものあらんと云ふものあり  
 是れ或は然らん故に假りに之を斷簡遺策と看做すも猶其  
 秀氣の藹々として文字間に溢れ前數首にも勝れるを見る  
 若し完全に留存したりしからんには蓋し一絶唱たること  
 疑ふし後世の作家能く之と顔顔することを得る者ありや  
 否や

附言 最後の一首の末段の「足引の山より云々は前回中  
 に示せる如く別に短歌にもありて唯君と妹との一字の  
 差あるのみ説者或は此數句は長歌の結句に似ずとの説  
 あれども予は之と所見を異にす此處此數句は能く聯論  
 して木竹相繼ぐ如きの觀は絶て之を見ず唐詩にも李白

の楚臺覽古の轉結に只今惟有西江月曾照吳王宮裏人とあり衛萬の吳宮怨の結末に祇今惟有西江月曾照吳王宮裏人とあり只々只と祇との一字の差あるのみ共に唐詩選に出づ事頗る相似たり

其七

歴史上の或事迹又は民間の或傳説類を記事體に叙述せる西洋風の長篇大作は本邦に於ては院本即ち俗に謂ふ所の義太夫本又は少くとも謡曲に非らざれば此比較を求め難きも而も體を具へて而して微なるものは萬葉中若干首ありに非らず無名氏の水江浦島子を詠するに曰く  
春の日の霞める時に、墨の江の岸に出で居て、釣舟のどを  
らふ見れば古の事ぞ思ほゆる、水の江の浦島の子が、堅魚

釣り鯛釣り誇り、七日まで家にも來ずて、海界を過て漕行  
くに海づみの、神の乙女に、たまさかにいこぎ向ひて、相か  
いらひ、こと成りしかば、かき結び、常世に到り、海づみの、神  
の宮の、内の邊の、たへある殿に、携り、二人入り居て、老もせ  
ず死もせずして、とこしへに、ありけるものを、世間の愚た  
る人の、吾妹子に告りてかたらく、暫は、家に歸りて、父母に、  
事をも告らひ、明日の、こと、吾は來なんと、言ひければ、妹が  
言へらく、常世邊に、また還り來て、今のこと、逢はんとから  
ば、此篋、開くかゆめと、そこらくに、固めしことを、墨の江に、  
歸り來りて、家見れど、家も見かねて、里見れど、里も見かね  
て、怪しと、そこに思はく、家ゆ出て、三年のほどに、牆も無く、  
家滅せめやと、此篋を開きて見れば、元のこと、家はあらん

と、玉篋すこし開くに、白雲の箱より出て、常世邊に、棚引ぬ  
れば、立ち走り、叫び袖振り、こいまろび、足すりしつゝ、忽ち  
に、心消失せぬ、若かりし、膚も皺みぬ、黒かりし、髪も白けぬ  
ゆあゆあは、氣さへ絶えて、後遂に、命死ける、水の江の浦島  
の子が、家處見ゆ、

高橋連蟲麻呂の勝鹿真間の娘子を詠するに曰く

鳥が啼く、吾妻の國に、古に、有けることと、今までに、絶えず  
言ひ來る、勝鹿の、真間の、手兒奈が、麻衣に、青袴つけ、直さ麻  
を、裳には、織着て、髪だにも、搔は梳らず、履をだに、はかず行  
けども、錦綾の、中につゝめる、齋兒も、妹にしかめや、望月の、  
たれる、面輪に、花のごと、咲て立てれば、夏蟲の、火に入るが  
ごと、水門入に、船こぐ如く、よりかぐれ、人の言ふとき、幾ば

くも、生らぬものを、何すとか、身を田名知りて、浪の音の、騒  
ぐ、湊の、奥津城に、妹が臥やせる、遠き世に、ありけることを  
昨日しも、見けんが、ごども、おもほゆるかも、

反歌

勝鹿の、真間の、井見れば、立あらし、

水汲ましけん、手兒奈し思ほゆ、

又同じ高橋連の、菟原處女の墓を見るは、前二首に比すれば  
詩情的辭藻の、足らざる點に於て、頗る劣れりと雖ども、亦同  
種類に屬すべきものゝ一あり曰く

葦の屋の、菟原乙女が、八年兒の、片生の時ゆ、小放りに、髪た  
ぐまで、に、並び居る、家にも見ぬす、盧木綿の、籠りて居れば、  
見てしがと、悵憤せん、時の、垣秀あす、人の訪ふとき、血沼壯

士、荒原壯士の、伏屋焼き、すゝし競ひて、相慕ひしける時に、  
焼太刀の、手柄押捺り、白真弓、鞆取負ひて、水に入り、火にも  
入らんと立ち向ひ、競へる時に、我妹子し、母に語らく、倭文  
手纏賤しき吾がゆゑ、丈夫の、争ふ見れば、生りとも逢ふべ  
くあれや、しゝくしろ、黄泉に待たんと、隠ぬの、下ばへ置て、  
打ち歎き、妹が去れば、血沼壯士、其夜夢に見、取りつゞき、追  
ひ行きければ、後れたる、荒原壯士も、い仰ぎて、叫びおらび、  
足すりし、牙がみたけびて、もころ男に、まけてはあらじと、  
懸佩の、小太刀取りはき、どころづら、尋行きければ、親族を  
も、いより集ひて、永き代に、標にせんと、遠き世に語りつが  
んど、處女墓中に、造り置き、壯士墓、こあたかあたに、造り置  
ける、故よし聞きて、知らねども、新喪のごとも、音泣きつる

か、  
此等の諸作亦後世作家の容易に及ばざる所、予は偏に後世  
の和歌者流が此等の摸範に依り之を發達して、説話的詩界  
を宏濶からしむるを知らず、遂に説話の版圖は渠等が文雅  
以外に蔑視せる謠曲及び院本に前後蠶食せられて、復た魯  
戈を虞淵の顔日に揮ふこと能はざりしを悲むなり

(其 八)

余輩文學者が萬葉時代の詩賦的文化を論究するは、首とし  
て長歌に在り、雖も短歌も亦詩賦の一部分たることは、素  
より論なし、而して短歌に至りても、鏘鏘玉振して、後世群作  
家の上に超逸するを見る、今試に予が最も愛吟するもの十  
餘首を左に抄出す之を後世の諸作に比せば、其辭氣の如何



に雄壯に其氣宇の如何に空濶に而して又時に細心精緻の如何に其裏に隠見するものあるかを見ん(題詞は予が便宜節縮したるものと知るべし)

中大兄御歌

渡津海の豊旗雲に入日さし、

今宵の月夜、明らけくかも

在唐國憶故郷歌

山上憶良

いざ子どもはやも日本へ、大伴の、

美津の濱松、まぢ戀ぬらん、

志貴皇子御歌

葦邊行く、鴨の羽際に、霜降りて、

寒き夕は、大和し思ほゆ、

文武帝御製

三芳野の山の嵐の、寒けくに、

はたや今宵も、わが獨り寝ん、

大泊皇女御歌

二人行けど、行過ぎがたき、秋山を、

いかでか君が、ひとり超えん、

志貴皇子薨後の作

無名氏

高圓の野べの秋萩、いたづらに、

ささか散るらん、見人あしに、

思京歌

藤浪の花は盛りに、かりにけり、

防人某

奈良の都を思ほすや君

吊河内王

手持女王

豊國の鏡の山の岩戸たて

かくりにけらし、まてと來まらず

見砌上瞿麥花

家持

秋さらば、見つゝしぬべと、妹がうゑし

宿のなでして、さきにけるかも

思人歌

額田王

君まつと、わがこひ居れば、我宿の

簾動かし、秋の風吹く

送家持上京歌

大伴四綱

月夜よし、河の音清し、いざこゝに

行くも行かぬも、遊びて行かぬ

詠梅花

山上憶良

春されば、まづ咲く宿の梅の花

ひとり見つゝや、春日くらさん

同上

志氏大道

春の野に、鳴や鶯、あつけんど

我家の園に、梅が花さく

詠月

無名氏

山の端に、いざよふ月を、出んかど

まちつゝ居るに、夜はくだちつゝ

登筑波山詠月歌

無名氏

天の原、雲なき夕に、烏玉の

宵渡る月の、入らまぐ惜しも

見雪憶京

大伴旅人

沫雪の、ほころるるに降りしけば、  
奈良の都し、思ほゆるかも、

以上數回に例證し來れる所を見れば本邦の詩賦的文化は如何に萬葉時代に發達し居たりしかを見るに足るべし而して萬葉收むる所の諸歌は上雄略帝の朝に遡り大津清見原等の諸京の時代を経て漸く藤原京奈良京に入る而して萬葉末の大家大伴家持の如きは延暦四年の薨去とあれば其頃は桓武帝が已に奈良の京を去り一旦長岡の京に移り玉ひし後にして平安京の奠都に先つこと幾もなき時代也

れば詩賦的文化の餘勢は猶平安京奠都の始め頃までも及べるが如し我國が詩國として最も大なりしは實に此間に在り但藤原京奈良京は其最盛時代に當れるを以て概言すれば奈良朝を以て我朝詩賦の最大時期として可あるが如し

(其九)

奈良朝前後に於ける我詩賦界の餘勢は平安奠都の始めに於て一轉し更に一新勢を創め寛平延喜前後に於て其頂巔に達したり之を古今時代と稱すべし意ふに古今集の收むる所は萬葉の遺脱をも拾ふと稱するも此等は讀人不知と記せるもの杯に幾許かあるべきも其數定に僅々なれば之を時代中に算せずして可なり其他は大概奠都以後のもの

にして最も貞観乃至延喜のものを多しとす而して寛平延喜前後は和歌者流か歌仙として崇拜する貫之を始めし友則躬恒忠岑等の輩出せし時代にして萬葉後の和歌の最盛は此時に在り是れ世人の熟知する所なり然るに後世の和歌者流の大多數は古今時代を見ること猶唐朝の支那詩に於ける如きの觀ありと雖も識者を以て之を見れば是れ殆んど同日の論に非らず蓋し支那詩は唐朝前のものと唐朝以後のものとの其体裁結構劃然たる經界ありて互に相異なるの点に於て略相似たりと雖も支那詩に在りては唐朝前のものにも頗る秀氣多きに拘はらず唐朝以後に於て新規の發明尠らず隨て唐朝に至り頗る進歩したり

と見るべきこと少からざるも和歌に在りては毫も進歩と見て見るべきもの無きのみならず其實萬葉時代に比すれば顯然たる退歩の狀あるを以てあり余は古今時代を以て和歌退歩の第一期とする者あり而して言語の差違は余が見て以て退歩の徴とするものに非ざるなり蓋し言語は概ね時と變遷す古語を使用するもの必らずしも優等からず今語を使用するもの必らずしも劣等からず其實言語の變遷を顧みず故さらに好んで不通の古語を用ふるは却て奇僻に陥ること多し漢文に於て物徂徠が故さらに今人に通せざる古文字を用ひ其高弟春臺の爲めに痛惜せられしもの之れが爲めなり余が古今時代を以て萬葉時代に劣れりとするものは首として思想の收縮淺薄

氣局の狭少、辭藻の浮華、軟弱に在り。何をか思想の收縮と謂ふ曰く、萬葉時代に在りては、隨分錯綜せる思想を一篇中に叙述するの構造ありしも、古今時代に至りては、思想頗る單一と爲り、少しく錯綜複雑なる落想に至りては、思想も物景も之を湊合抽釋すること能はざりしに在り。蓋し人間の情感も宇宙の物景も其詩賦に入るべきもの固より、聯續排比するもの極めて多し之を詞藻に表出するに、は相應に行文遣辭の境域を有せざるべからず、萬葉時代に、は長歌盛に行はる故に、此境域あり、古今に至りて、乃ち殆んど、長歌を作るの技倆を失へり、故に、此境域を失し、故に、思想の收縮殆んど、言ふに堪へざるものあり、試に、余が點檢したる所を以てすれば、古今集には、長歌は、卷末に、僅々四五篇あるの

み貫之家集、躬恒家集、友則家集には、一首も無し、忠岑家集に、僅に二首あるも、其一首は實に古今集のと同物あり、且つ此等、の長歌亦皆萬葉の諸作の後塵、だも拜し得べきものある無し、以て當時の全局を推知すべきあり。思想の淺薄と云ふことは、収縮と云ふとは、自ら別なり、淺薄は、深遠に對して、云ふことは、思想の深遠と云ふに付ては、其種類一に止まらず、或は哲理的に深遠なるものあるべし、或は感情的に深遠あるものあるべし、或は遣辭上に深遠あるものあるべし、是れ又長歌の存否は大なる關係を有す、何と云へば、長歌を求めむる境域も亦甚だ限制せらるれば、あり、古今時代に、長歌極めて稀あるは、概括的に、其深遠ならず、即ち淺薄なる

を推測するに足る然れども思想の淺薄は必らずしも辭句の長短と相比例すと云ふには非らず短なるものにも素より深遠のもの無きには非らず唯古今集中の短歌に於て深遠のものありやと云ふに先づ指を

風吹けば、沖津白浪たつ田山、

夜はにや君が、ひとりこゆらん

に屈すべきも是れ宛然たる萬葉集中の歌にして題も「題知らず」とあり作者も「讀人不知」とあり其歌後の添書を見るも「昔大和の國云々」とかん云ひ傳へたる「云々と在りて奈良朝の逸歌との外は見ざるを奈何せん」此歌の話は嘗て著聞集か宇治拾遺かの中にも一讀せしやう覺ゆ余の寡聞を以てしては古今時代に於て思想深遠と敬服すべき

ものは晨星も雷ならざるものゝ如し

(其 十)

氣局の狭小とは意匠の寰區の廓恢からざるを云ふ故に思想の收縮淺薄とは自ら別あり而して構造廣大なるものは寰區廓恢なり易きの理されば氣局の狭小亦長歌の廢棄に伴ふこと少からずと雖も辭藻の長きもの必らずしも氣局廣大にして短きもの必らずしも狭小なりと云ふには非らず長きものにては氣局の狭小あるものあり枕詞懸詞を以て徒らに引延べたる後世の悪長歌の如き之を譬ふれば出來損ひの「八幡知らず」のみ何ぞ寰區の廓恢あらんや之に反して辭藻の短きものにては亦氣局の廣大あるものあり試に前回に例示せし

天の原、雲あき夕に、烏玉の、

宵渡る月の、入らまじく惜しも、

を玩味せよ如何に其寰區の廣大あるかを感ずべし勿論詩情的寰區の廣大は必らずしも物理的寰區の廣大と相伴ふには非らず出所も上句も記憶せざれども或人武藏野の廣きを月に寄せて讀出したるものに「草より出て草にこそ入れ」とあり又類似の趣考にて太田道灌の

露おかぬ方もありけり夕立の、

空より廣き武藏野の原

とあり試に之を玩味せよ是れ小兒に長き物は何長崎から鎗が出たと答ふるの類と髣髴たることに故さらに武藏野の廣大なるを詠出したるものなるも寧ろ物理的廣大を

歌語を以て形容したるのみ物理的には如何にも廣大あるべきも詩情的廣大に非らず之に反し試に前回に例示せる

渡津海の、豊旗雲に、入日さし

今宵の月夜、明らけくかも

又は

月夜よし、河の音清し、いざこゝに、

行くも行かぬも、遊びて行かな、

の類を熟讀せよ特に物理的寰區の廣大を言はざるも吟誦の間自ら氣局の廣大を覺ゆべし詩賦の情感上に於て氣局の廣大とは大畧如何なるものなるかは是れにて自ら推知すべし而して古今時代の歌調に於ては氣局概ね狭小にして迎も萬葉の古に及ばず

遺辭の浮華軟弱とは浮華は過度に詞章を美麗にするの意  
 にして沈鬱と相反し軟弱とは骨力あきの謂にして適健と  
 相反す古今の遺辭は美は即ち美あるも動もすれば其度に  
 過ぎて却て浮華に陥り又其力めて流暢あるは必らずしも  
 咎むべからざるも其弊は氣骨を失ひ軟弱に陥り所謂婦女  
 様の先驅をなせり是れ或は古今の選者貫之躬恒等の好尙  
 より自然此類の歌を多分に選出せしかとも思はるれども  
 當時流行の風調は斯くの如くなりしことは明白かり伊勢  
 物語に收むる所のものは稍高古のもの少からざるも是れ  
 には古今風流行以前のものもあるべく又伊勢物語の文章  
 は殊に簡古を力めたるものなれば歌も亦或は故さらに古  
 調を摸擬したるものもあるべく未だ以て當時一般の風格  
 を判するの標準とあすを得ざるに似たり

意ふに古今時代に於ては有爲の男子は概ね心を漢學に馳  
 せたること猶今日の男子の洋學に於けるが如し隨つて和  
 文は當時頗る發達したるにも關はらず其版圖の境域漸次  
 に婦人社會に移轉したる如き狀勢を現出し加ふるに當時  
 恬淡の餘弊人心自から漫散に流れ之れが爲め和文和歌は  
 自然浮華軟弱に傾きしものあるべし貫之が土佐日記を和  
 文を以て作るに男もすといふ日記といふものを女もして  
 みんとてするありと云ふを冒頭とし屏手の作に擬せし如  
 き以て當時の大概を知るに足らん  
 氣韻のこどに至りては古今は下品なりとは云はず唯萬葉  
 の品格は高僧碩徳老将の威風に類し古今のは宮媛名姫の



風姿に類するの差あるあり故に颯爽端嚴の高風に至りて  
 は古今に缺くる所あるを免れざるが如し  
 以上は予が古今時代を以て萬葉時代に及ばずとする要領  
 かり識者若し否らずとせば請ふ敢て教を奉せん  
 附言 前回に風吹けば云々の歌の咄は著聞集か宇治拾  
 遺にても見しやう覺ゆと記せしに今夜本回を執筆する  
 に當り予が嘗て自ら會心の處に朱點を施し置きし伊勢  
 物語を緝閱するに際し伊勢物語中にも出で居るを見出  
 したり併し他書にても一見せしやうに覺ゆ且つ伊勢物  
 語中にあるにせよ宛然萬葉中の作と云ふ前論は予は猶  
 取て動かざらんとす  
 又附言 已に前文を草し終りたる後今朝偶々岸田吟香

翁の來訪あり談偶々風吹けばの歌に及ぶ翁曰く右と類  
 似の歌は現に萬葉に在りたりと覺ゆこのこと故更に取  
 調べしに果して左の歌あり  
 渡津海の沖津白浪たつ田山  
 いつか越なん妹があたり見ん

(其十一)

賀茂眞淵の邇飛麻那微に曰く  
 大和國は丈夫國にして古はをみなもますらをに習へり  
 かれ萬葉の歌集は凡丈夫の手ぶりなり山城國はたをや  
 め國にして丈夫もたをやめを習ひぬかれ古今歌集の歌  
 は専ら手弱女の姿あり仍てかの古今歌集に六人の歌を  
 判るにのどかにさやかかるを姿を得たりとし強くかた

きを鄙びたりといへるは、その國その時の姿として、ひろく古をかへり見ざるものあり……古今歌集出てよりは和びたるを歌とをぼへて、雄々しく強きを卑しとするは甚しきひが事なり……

眞淵にも随分愚論あり之に反對せる香川景樹には猶更愚論あり而も前文に關し景樹が其新學異見に於て大和國を丈夫國とし山城を女子國とするを難せる如きは當れり蓋し地勢氣候大に殊されば其影響の詩賦に及ぶことなきにあらざる譬へば常に烟霧暝濛の中に坐臥する者には悲壯の韻多かるべく常に鶯花駘蕩の間に徘徊する者には輕快の韻多かるべきの類なきに非らずと雖も大和と山城は犬牙

間豈見るべきの差あらんや六人の歌云々と云へる所も語弊なきに非らず是亦景樹の難する所一理なきにあらす雖然前文の大體に於ては余は同感を表する者あり余を以て之を見れば古今以下は如何にしても萬葉時代に劣れり是れ獨り其詞章の強弱に付てのみならず上來論する如き諸種の點に付て然るなり之を聞く定家家隆の兩卿嘗て後鳥羽院の勅問に對へ壬生忠岑の有明のつれなく見ぬし別れより

を以て古今集中第一の秀歌とせしとぞ此鑑定の當否は頗る疑ありと雖も今姑く之を舍き此歌が古今中屈指の秀歌

たる如きに於ては古今の大概は實例に依らずして推知す  
 べきあり  
 古今以後勅選歌集世を追ひて世に出で増して三代集と爲  
 り八代集と爲り遂に二十一代集と爲り旁ら準勅選の集あ  
 り其他諸名家の家集あり歌合あり百首の類ありて汗牛充  
 棟も管からざるに至れるは世人の能く知る所なり就中新  
 古今前後は俊成定家家隆の諸宗匠等の輩出せし時にして  
 延喜後の最盛時あるのみならず世或は此時代を以て和歌  
 の最盛時とする者さへあるに至る而して其姿態は古今に  
 比し更に流麗優美に趣きたるは定家が西行に勸め其立上  
 る富士の煙の空に消ての歌の立上るを風に靡くと改めた  
 りとの一話を見ても明なり其他各時代とも其風調姿態或

は撰者の好尚に因り或は時風の變化に因り幾多の變遷あ  
 りしかり然れども其差違は余等を以て之を見れば畢竟鴉  
 と鶺鴒山鳥と雉子位のみ均しく皆古今の塑型を免れず且つ  
 其塑型内に於ては古今は優に其壓卷たるは尋常和歌者流  
 の一般の識者の認むる所なり余は嘗て試に歴代集を展閱  
 せしも首々皆大同小異恰も河原に出て小石の異同を調ふ  
 ると均しく迎も馬鹿々々しくて精讀に足るものあし此評  
 稍酷なるに似たりと雖も余は眞に爾思ふなり嗚呼長歌一  
 たび棄れて歌運滔々次第に低地に赴き余をして此言を發  
 せしむるに至る悲夫  
 附言 萬葉に載する所の人丸の歌の  
 梅の花、それとも見えす、久方の、

天ぎる雪の、あべてふれとば  
 に付き西行法師嘗て之を同じ人丸の「ほのぼのと、明石の  
 浦の」に勝れりと評し、梅の花の歌は凡夫の及ぶべきにあ  
 らず大なる歌とはこれを云ふあり叶ふべきにあらねど  
 も歌はかやうに讀まんと思ふべし」と云へるは即ち予が  
 前回に於て短歌にも氣局の廣大ありと云へる廣大の意  
 なるべし前回に之を引用することに氣付かざりしによ  
 り茲に追記す  
 又附言 前回に引例せる武藏野の歌に付或人より大納  
 言通方の  
 武藏野は月の入るべき、峯もなし、  
 尾花が未にかゝる白雲

を通知し來れり是も猶物理的廣大を免れず若し武藏野  
 は「を見渡せば」とせば一層詩情的とならん

(其十二)

歴代集各時代のことは前回に之を概論したり若し精密  
 に云ふときは後年の選集にして寛平延喜は更なり甚だし  
 きは奈良朝の人なる人丸赤人あとの作さへ收入せるもの  
 あるを以て選集を以て直ちに時代を分つべきに非らずと  
 雖も而も各選集ともに概ね其選定時代に近き作歌最も其  
 多きに居り且つ舊作と雖も其時代の風調に最も近きもの  
 を採收せるが故に姑く之を各選集時代の風調と見て固よ  
 り妨げなきなり而して此時代中に於て吾人は不言に經過  
 すべからざる二異才あるを見る僧西行と鎌倉右大臣と是

あり 脱俗の高人として西行は實に不世出の偉人あり而して彼  
 れは行雲流水心を塵外に置き自然と興に四方に行脚し行  
 行且つ吟詠して以つて一代の詩人となり彼れは千載新  
 古今時代に於て京華綺羅の外に自然に一旗幟を樹て以て  
 當時の所謂京家あるものを眼下に睥睨せり彼れは後鳥羽  
 院をして其御口傳中に於て

西行はをもしろくて、しかもこゝろに殊にふかくあはれ  
 あるありかたく出来し、かたきかたも、ともに相兼てみゆ、  
 生得の歌人どをぼゆ、これによりて、をぼるげの人の、まね  
 びあどすべき歌にあらす、不可説の上手あり  
 と歎賛し玉はしめ又嘗て侍臣に向て「柿の本の再誕か」と勅

誕し玉はしめたり(定家卿愚秘抄)而して彼れが終生の一志  
 願たりし

願はくば、花のもとにて、春死なん、  
 その二月の、望月のころ

の如き遣辭意匠共に非凡にして讀者をして其玩味次第に  
 て種々の感想を起さしむるに足ること猶同一の明月にし  
 て觀者の境遇により悲壯にも愉快にも凄凉にも種々の感  
 想を興ふると一般あるも全体より之を括論すれば此大西  
 行と雖ども彼れ自身も和歌はうるはしくよむべきあり古  
 今集の風體を本としてよむべしと云ひし位にて到底古今  
 集鎔埒中の一人たることを免れざるあり  
 實朝は其身世、西行とは雲泥の差ありたる人あり彼れは歴

史的人物としては蓋し史傳の誣妄あるべしと信すべき性  
行ありし人あり彼れは壯年にして即世し而も其末路は甚  
だ悲惨なりき而して彼れは少くとも詩人として一異彩を  
我文學の史上に耀せり彼れは新古今調の盛に京師に行は  
るゝの時に於て金殿玉樓の中に生長し且つ詞章に於ては  
父兄の薰陶も亦一貴公子の身を以て獨力復古の大旗幟  
を關東の野に立て京畿の諸歌人をして顔色おからしめた  
り加茂眞淵が其邇飛麻那微中に於て  
鎌倉の大まうち君の歌は今このかたの一人あり  
とて激賞措かざるも亦其故なきに非らざるあり甚しきは  
實朝を稱して和歌の中興と爲す者あるに至る成程彼れが  
作る所の

箱根路をわが超來れば伊豆の海や  
沖の小島に波のよる見ゆ  
武夫の矢なみつくらふ籠手の上に  
霞たばしる那須の篠原  
山は裂け海はあせせん世ありとも  
君に二心われあらめやも

の類の如き雄壯の秀吟たること疑なし其他の諸作に至り  
ても萬葉の風格を帯ぶるもの多きも亦事實なりとす然れ  
ども其造詣の頂上は果して如何彼れは一の長篇大作あり  
しを聞かず彼れの詠歌の大体に付て見れば意匠に於て古  
今一類の諸歌と鴻溝懸隔せる出色のものあるを見ず其遣  
辭の頗る萬葉に類するもの少からずとするも彼れは遂に

人丸赤人憶良金村一輩の士の好門生たるに過ぎざるあり  
 豈之れと比肩對衝するを得んや  
 千載新古今の頃にやありけん今様てふもの世に起れり是  
 亦和歌の一種と見るべきものなり蓋し當時和歌が餘りに  
 無變化のものとなれるが爲めに物窮すれば必らず復るの  
 理より此新機軸を考案せしものありしと及び歌唱の實用  
 に供する爲めに出しならんか鴨長明も  
 今様姿の歌の中にもよくよみつるをば、謗家とて謗る事  
 なし  
 と評せり彼の徳大寺左大將の  
 古き都を來て見れば、淺茅が原とぞ、おりにける、月の光は、  
 くまなくて、秋風のみぞ身にはしむ

の如き實に凄凉悲哀限り無きの餘情あり今様の風體亦長  
 歌の一變體のみ其體に賤むべきの道理あるなし若し之を  
 研磨擴張したらんには此風體を以て又一種の良詩界を開  
 きしやも知るべからず然れども今様は遂に如斯の發達を  
 なすに至らざりき  
 附言 實朝函根路の歌を余は常に  
 函根路をわが超來れば伊豆の海に、干潟吹くらし、波騒ぐ  
 見ゆと記憶し居りたり此方一層壯快と思へども金槐集  
 に照合せしに本文に示せる通りあれば致方なし  
 (其十三)  
 勅選集の四部は南北朝の間に成り其最後の一部ある新續  
 古今集は南北合統後四十六年即ち足利義教の時に成ると

雖も其頃には歌道の既に甚だ衰微したる世にして之を概論  
 すれば是利乃至織豊二氏は詩賦界に於ては見るべきもの  
 無しと云ひて可なり是れ蓋し一面には騷亂相續きて文明  
 の治化は甚だ索莫を極めたると一面には所謂堂上方が吟  
 詠は乃公等の専賣品と心得而も窮屈千萬ある歌學の窠中  
 に蠢々然として小運動を爲し手腕振はず氣焰上らざるが  
 爲めあらん勿論其間に於ても歌道は決して世人に侮蔑せ  
 られたるには非らず武人社會にも太田道灌今川了俊毛利  
 元就武田信玄細川幽齋蒲生氏郷など頗る其道に堪能ある  
 人もありたるは皆人の知る所就中道灌は鐵中の錚々として稱  
 せられ其吟詠中にも  
 我庵は松原のとき海近く

富士の高嶺を、軒端に見る、

いそがすばぬれざらましを、旅人の、

あとよりはる、野路の村雨、

の如き又氏郷の

限りあれば、おかねと花は、ちるものを、

心みじかき、春の山風、

の如きは人口にも膾炙せる程あり然れども彼等は遂に一  
 般の歌風を振起するには至らざりしあり  
 意ふに、詩歌も亦一種の學問を要するあり詩歌は自然の發  
 音ありとし自然の發達に一任せんとするは和歌者流の愚  
 論にして彼等自身も亦内實は飽まで之を知る故に歌學の  
 研究事に於て非ありといふに非ず然れども我中世以降の



歌學は頗る偏僻にして却て其發達を妨げたるを免れざるなり  
 蓋し當時の歌學は崇徳帝前後に俊賴基俊兩卿等が互に小  
 門戸を張り相拮抗せし頃に濫觴し俊成定家頃に自ら師範  
 宗匠と云ふ如き姿を爲し其子孫たる者が家を別ち派を立  
 て一種遊藝の師範家の如き形狀を馴致せしに起れり當時  
 陸續として歌學に關する著述の多かりしは其今日に遺存  
 せるものを見ても之を知るべきかり但し始めの程は必ら  
 ずしも流派を争ひ黨援を樹るの目的に出しにも非らず後  
 鳥羽院の御撰清輔の隨筆等を見て之を知るに足る然る  
 に俊成定家等が家秘の著述あるに隨ひ漸次に一種の弊風  
 起り秘傳と云ふもの世に出で其末弊は禁詞制詞と云ふ

ものを以て詞賦界を拘束し遂には三木傳三鳥傳と云ふ  
 ものさへ出るに至れり加之當時の諸書を閱するに其出色  
 のものと雖も概皆纖細煩雜の末事をのみ論評討究し絶て  
 俊邁高壯の大規範を垂るゝものあるを見ず之を譬ふれば  
 工匠が障子の骨の組合せ様違棚の板の削り様を其徒弟に  
 傳授する位のみ其れも折々は間違ありて殿堂伽藍の意匠  
 構造及び其竣工後の壯觀の如何の如きは夢にだも論究せ  
 ざるも異ならず是れ蓋し當時に於て第一には長歌は之を  
 度外に置き短歌と雖も瑣末の字句の末に拘泥し其極詩歌  
 の本色を忘れ之を以て一子相傳の商賣品同様に見るに至  
 るに因らずんば非らず加之點取の歌合の流行は只管無難  
 にして時様に適ひ作者をして負けざらんことを希望せし

めし爲一面には競争の利益も多少ありたらんが一面には  
 意匠をして概ね平板に歸せしめ斬新の機軸を考案する氣  
 概かからしめたり如此に至ては歌學も何の用をか爲さん  
 獨り用を爲さざるのみならず反て進歩の妨害をなせしと  
 疑ふべからず此等のこと余敢て之を誹譏するの意ありて  
 言ふに非らず當時措紳家の境遇の如何を想像すれば反て  
 之を氣の毒と思はんとす況んや荷田在滿等が百數十年前  
 既に之を痛論せるに於てをや在滿國歌八論篤胤歌道大意  
 参考)惟事實は事實として再び余の筆端に落ちざるを得ざ  
 るあり

我國詩賦界の狀態は如此にして徳川氏の世とあれり之れ  
 を彼の國字も亦く國學もなく而も彼れが如きの名吟佳作

多かりし藤原京奈良京の時代に比せば其隆替果して如何  
 ぞや 附言 奈良朝前後にも國字ありたりとの説は遽に信じ

難し 又附言 道灌の「我庵は」の作は名將言行錄に據る或書に  
 は

我庵は、松原遠く、海近く、  
 富士の高嶺を、軒端にぞ見る、  
 とありて出處を慕景集とせり余は  
 我庵は、松原つゞき、海近く、  
 軒端に富士の高嶺をぞ見る、  
 と記臆し居りたり是れが一番好きやうに思はる因て正

確のものを得んと態々圖書館に赴き群書類從中の幕景  
集と寫本の幕景集二部其中の一部には道灌歌集と云ふ  
を合載したるものと都合三部を點檢したるも此歌亦し  
如何あることにか識者の教示を得たし

(其十四)

之を美術に考ふるに奈良の朝は彫刻に於て非常に發達し  
平安奠都後百年乃至二百年の間には繪畫彫刻共に一たび衰  
達し降て足利氏の初世に及びては繪畫彫刻共に一たび衰  
運に陥りしも其中世より繪畫に於て雪舟周文秋月雪村宗  
丹元信等の偉人前後勃興し豊臣氏に及びて永徳山樂等の  
巨人輩出し異常の光怪を我美術界に放てり之に比すれば  
美術と甚だ相近邇せる詩賦界に於て彼れが如き衰態を遺

せしは文學家等の宜く愧死すべき所あり  
元和偃武の後五十六年奎運漸く再旋するに及び國學の復  
古に伴ひ和歌社會亦漸次に一大生面を開きたり其原委を  
案するに水戸義公と時を同じくして僧契沖難波に起り桑門  
の身に在りながら始めて國典の古學に志し茲に國學復古  
の端緒は開けたり彼れは義公の囑に因り萬葉代匠記二十  
卷總釋二卷を造りたり契沖の友に下河邊長流あり契沖の  
流を汲める者に荷田春滿(即ち東磨)あり春滿の門人に加茂  
眞淵あり春滿の嗣子に荷田在滿あり眞淵の門人に本居宣  
長村田春海加藤千蔭等あり稍後れて同く本居を祖述せる  
平田篤胤あり此諸人及び同門の駿足等前後相踵ぎ翁然と  
して起り國學を以て一世を風靡し復古の學大に振ふ彼等

は其學殖に於て長短深淺をきにあらず且つ彼等は必らずしも歌人に非らずと雖も國學は歌學と相關聯せること多きを以て概ね詠歌を試みざるもの無きのみならず彼等は皆萬葉の古風を追慕し自ら能く古調を以て其吟懷を發揮せり彼等は多く歌學の書を著せり而して彼等の著せる所は概皆雄壯活潑且つ其著目も亦頗る宏遠にして往時京家の歌學書の比にあらず彼等は京家の狹隘偏僻を痛論して之に一大打撃を加へたり彼等は短歌の既に陳腐あるを知り長歌の貴ぶべきを知れり本居の「うひ山ぶみ」に長歌をもよむべし長歌は古風のかた殊にまされり古今集あるは、みあよくもあらず、中にいとつたなきもあり、大かた今の京になりての世には、長歌よむことは、やうく

にまれになりて、そのよみざまも、つたあくなりしあり、後世にいたりては、いよくよむことまれありしを、萬葉風の歌をよむ事おこりて、近きほどは、又皆長歌をも多くよむことゝなりて、其中には萬葉集に入るとも、をさくはづかしかるまじきほどのものも、まれには見ゆるは、いと多くめでたき大御世の榮紅にぞ有ける、そもく世の中にあらゆる諸の事の中には、歌によまんとするに、後世風にては、よみとりがたき事の多かるに、返て古風の長歌にては、よくよみとらるゝことおほし、これらにつけても、古風の長歌、必ずよみあらぶべきことありとある、如き春海の「歌かたり」に今深くおもふに、短歌は古より世々にすぐれたる歌人も

多く出で、めづらかあるたくみ、おもしろきふしも、いひつ  
くしたれば、今はいかに思ひはかりても、皆古人の跡のみ  
ふまでは、ねあらぬわざにて、新しくいひ出んふしは難か  
るべし、たゞ長歌は、古今集の頃より、こなたには、これを宗と  
よめる人もなく、異なるふしいひ出たる人もなくて、世々  
に歌數も少なければ、古の人の思ひのこせる巧も、いひも  
らせるふしも多かるべし、かく降りたる世にして、めづら  
かに新なる事を一ふしよみいで、古人にもはづまじき  
わざをさしぬてんものは、たゞ長歌あり、今より後の世に、  
詞のはやしに遊びて、この道に才かしこからん人は、こゝ  
に心を深めん事こそあらまほしけれ、  
とある如き以て復古派諸子の識見を概見すべきあり之を

繪畫に譬ふれば、國學復古の業に於て、契沖は如雪、周文を  
身に兼ねたる如く、眞淵は雪舟の如く、本居は元信の如く、篤  
胤は探幽の如く、其他の諸氏は、秋月、雪村、宗丹、啓書記、之信、永  
徳、山樂たる者、指を屈して數ふべきあり、獨り奈何せん、彼等  
が學殖の造詣は、其全斑に就て之を見ても、周文、雪舟以下  
の諸名工の美術上の造詣に比すれば、稍遜色あるのみならず  
詩賦の一事のみに就て云ふときは、彼等は、慥に數十籌を輸  
するなり、彼等は、萬葉の古を慕ふも、寧ろ議論に長じて、實行  
に短かりしあり、  
附言 東京圖書館長 田中稻城君は、太田道灌の我庵の歌  
に付き、余が爲に大に搜索の勞を取られ、其結果の通知を  
辱くせり、即ち舊幕官撰の武藏新風土記に、太田家譜を引

き又同じ官撰の府内備考に關東兵亂記を引き兩書ども  
「松原つゞき」とあり江戸名所圖繪野史等にも同様あり永  
享記關東合戦記の二書並に細井廣澤の慕景集奥書には  
「松原遠く」とあり古來二説あるからんものことなり又思  
見にては下句は「軒端に富士の高嶺をぞ見る」の方我菴と  
起したる主格を直ちに軒にて受け且つ富士の高嶺を兩  
句に割りて一層の趣味を加ふれども是は何書にも見  
ざるに似たり

(其十五)

復古學者の長歌に於ける議論は着々聞くべきものある  
り村田春海の「歌かたり」は更に論じて曰く  
古の短歌は單心あるもの也、そは短歌はしかよひべき姿

のものあればあり、くさくさに思ふ事多き時は、そを長歌  
にのぶれば、短歌にあまたの事を、とりこめていはん事は  
有まじき理あり、三代集の頃は長歌衰へて、人々多くもね  
よまらず、おのづからのどかにも細やかに、猶ひとへ心な  
る本の姿を失せざりける、かくて題詠の歌専らとあり  
てよりは、僅に三十字あまり一文字の中に題の意をわ  
ながちに盡さんと思ふ故に、歌の様ちたたくそありに  
けれ、ざるを事廣しと思ふにやいと笑ふにたへぬ事也、若  
事廣からずと思ふしあらば、長歌こそあれ短歌の上に、  
さのみはいかで事廣からん事を求むべき、  
余の所見と雖も亦實に之に外ならざるなり彼等は萬葉の  
風調に私淑し古今以來の長歌は齒牙に懸くるにも足らざ

ることを看破せり本居が「玉かつま」中に於て古今集中の長歌を痛撃せるも余が嘗て一見して記憶する所あり平安京以來の長歌にして少しく彼等の寛容を得たるは春海が同じ歌かたり中に「宇多醍醐の御時より花山一條の御時まで」の人の猶めでたき歌もたまはありて、またひとつの姿どもいふべし、折にふれてその様を學ばんもあしからずと云へる位のものに過ぎず而して彼等が後世の長歌に對する識見は同じ「歌かたり」中の左の一節にて之を概見することを得べし

古の長歌は、そのさま巧にして事を述ぶること廣く、詞少くして心深し、後の長歌は、其さま拙くして事を述ぶること狭く、詞いたづらに長くして、心は淺くおろそかなり、さ

て古今集に歌奉れる時の目錄の長歌に、四季戀雜のこと  
をいひつらねたるは、理さる事あるを、後の世の人みだりに  
にそれにあらひて、おぼさの歌にも春は秋は霞の霧のど  
とて、四季の事をいひのべたる歌の多きは、いかなる故あ  
らん、古今集のは、目錄の歌なればよしあり、さるたぐひに  
もあらぬ事に、四季のものをいひ並べんは、をかしきふしにも  
あらじかし、後の世の人は古今集の長歌のみを見て、これを  
長歌の姿ありと思ひ過れるやうあり、こはあまりに拙き  
あらはしとやいはむ、かにかくに後の世の人は長歌を、多  
くもよますこゝに心を深くも用ひずして、おのがよくも  
たどらず、よみも習はぬわざを強てなすければ、古人の如  
く、巧に廣く事を述べん事をあし得ぬまゝに、たと徒らあ

る春秋のものを多くとり出で、句の數を多く連ぬれば、その春秋の物によそへいへるふしをみるに、物と詞はかはれど、皆同じ心ある事を、ひと歌のうちに幾度もいひかへたるのみなるがおほし、すべて後の世の長歌は心はあぢはひかくして淺く、詞はやうかくして長し、うち見るにもうるさく、とあへんにも厭はしき物とやいはん、彼等の議論は甚だ好し、彼等は又自ら多くの古調の短歌を作り、長歌をも相應に作りたり、然れども本居が其うひ山ぶみ中に於て

萬葉風をよむことは、ちかきほど始まつたることにて、いまだその法度を示したる書なともあき故に、とかく古風家の歌はみだりあること、おほきぞかし

と云へる評語は、彼等自身をも包含したる批評たるを免れず、彼等の作る所の長歌、少らずと雖も、其短歌の割合に比すれば、頗る少し、本居は頗る詠歌の數に富みたる一人なるも、試に鈴屋集を閲すれば、今、机側に有合せざれば、明に其冊數を云ひ難きも、全集の凡そ十分に及ばざりしと覺ゆ、而して彼等の長歌は、余は未だ一々周密に研究するに遑わらずと雖も、其一斑を繙閱したる所、併に其中の傑作として、他書に抄出せる所を見るに、一唱三歎の秀逸あるを見ず、本居が「近きほどは又皆長歌をも多くよむこと、ありて、其中には萬葉に入るともをさく、はづかしがるまじきほどのもの、まれには見ゆる」と云ひしものは、果して如何ある實例ありや、余は甚だ之を聽かんことを欲するあり、橘守部の長歌選格



は偏見なきに非らざるも其大體に於ては支那詩に於る登々菴の古詩韻範とまで行かずとも亦頗る遠見の書たり而して契沖真淵荒木田久老千蔭春海等の長歌中の傑作を抄出して其瑕瑾を指摘し偏に後世の拙文を五七に續けしのみ口には常に萬葉の秀絶を唱へながら猶此の如きは如何ぞやあど、痛論せるも蓋し彼等の手腕は彼等の議論と相稱はざるを證すべきなり

(其十六)

余嘗て問答遺章と云ふ書を見る是れ加茂真淵が今は姓氏も明からざる某氏と往復の手翰を編纂したるものにて元は故ありて破綻まだらの寫本の儘京都の松崎家に傳はりしものと云ふ中に左の一文あり慷慨淋漓能く復古派の心

事を發揚せり是を以て其稍長文なるに關せず余は之を茲に抄出し讀者の一閱を煩さざるを得ず文中線を填せるは原本刊行前既に蠹蝕の爲め闕文せるものと知るべし示し給ふことしされど今とありていにしへの世をも人も語をも知らむには歌にしくものあし史あどにて、ひとわたりを知るがうへに古意を見て己もそれに似つかばやと思ひて朝夕によむが爲には教へずして古人のこゝろ、ことばを知るありさてこそ古のその世は人のこゝろかくぞ有してふをふかくしらるべししかればたゞ心に思ふ故ありてのみよみしはいにしへのことにて、今は業としてつとめずば、いかで古歌の風にいたらむ、いかで古世をも知られむ、たゞ藝と思ふ筋をやむべき也、小名聞

をすまじく大名聞を心かくべきあり、大名聞は千載の名  
 を思ひて今俗の事を忘るゝのみ  
 王威漸くにおどろへて臣の權専らなりし世はその臣に  
 へつらふ故に、天下のもの縉紳家にのみよろづにしたが  
 ひ来て、その後には鎌倉の世となりては、京家は政事をい  
 るふことあらず、たゞ遊藝の家とありて、それをだにわが  
 家のこととせんとせし俗意より、よろづおこれり、歌も學  
 問も大政のもとには侍れど、勢ひを以て政をあす時には、  
 さるたぐひはみな遊藝の部になりぬれば、おのづから家  
 てふこともいで来る也、王威盛るときに、よろづの事に  
 家流てふことは聞えず侍れば、皆王權によることありし  
 ければ今はたゞ學問も歌も世の益にあさんとするは、却

て短氣のことあり、何となくこのまじきに入て樂しみと  
 せんのみ、もし千載に友出来ば幸あらん、また天地日月の  
 今古同じければ、又いにしへにかへる代あるまじともい  
 ふべからず、さる代もあらば萬一も用ひられんやと、しら  
 れぬことをせめてはおもふのみ、御もとにはすべて古へ  
 好む人のあしとよ、いづこもさること也、東の都は天の下  
 の人あつまり侍れば、さすがに、おのづから古きを好む人  
 も多く侍れど、此人繁きにむかへては物の數にはあらず、  
 たゞうちあつまりて心ざしをかたらふほどのに、あるめ  
 り、おのが東へ下りしほどにはふつ(元)のまゝに侍らざり  
 しや、ちかくば契沖が書るものを人ごとに見、又は萬葉な  
 どやうのものも、やゝ多くみる様にありぬ、命ながくば心

八十八  
ゆく代にもあひあむをかく老ぼけては、さるたのみも待  
らす、今の京は邊土となりぬ、いにしへ大都會の時、一風  
にはかりがたかりけんを、言語をはじめて一様なるは、邊  
地のことあり、よりて人心せばくて、また邪意のみ多きは、  
さすがに國のわろき、残りし物、侍るを悦びたまふと  
承るこそ、限なくこゝにも悦侍り、よりてことばをも、こゝ  
ろをもかざらず、いみことをもかくさず、或は思ひ誤りあ  
らむをば、かさねて正してのたまはんものとおもへり、筆  
にまかせ侍るは、大かたの人の、うちむかひてかたらむよ  
りは、心ゆき侍ること也、此上もおもども、さるおほし入  
にて書かはしたまへかし  
彼れが世人の大覺醒を望むの情は實に切なり、彼れの至情

八十九  
は能く人を感動して、果然復古の學は大に興れり、彼等の學  
風は素より獨り詩歌の上止らず、隨て政事の上於て復  
古維新の大業に與りて、大に力ありしかり、唯詩歌の上のみ  
に就て云ふ時は、彼等の繼業者は、遂に復古の大功を成就し  
て、今日に遺すに至らず、況んや維新の偉勳をや、之を思ひ彼  
れを思へば、吾人は實に眞淵等の心事を悲ますんば、あらざ  
るあり  
復古學者の歌學は既に論ずる如く、議論に於て壯大ありし  
も、實用に於て手腕未だ之に伴はず、隨て猶圓熟を缺く所あ  
り、且つ其一般の世人に入り易からざりし爲め、一派の歌風  
其隙に乗じて、反動し遂に再び世人を眩惑するに至れり、香  
川景樹の一流即ち是れあり

香川景樹は本居宣長とは多少の交際ありしと見ゆ桂園一枝にも宣長と唱和の作を載す彼れも京家をば排斥せる一人あり少年の頃は古風の歌をも詠じたりとぞ然れども壯年以後の歌論歌風は復古派とは氷炭相容れず第一彼れは長歌を好まず偶々作るも巧妙あらず桂園一枝に載する所の長歌僅に三首のみ其れも長歌として甚だ短し彼れは此事に關し  
 愚老など生若き時専ら古文をたつとんで萬葉ぶり讀侍りしに長歌がちにもものして往々舊友のもとにも残りたる少なからず候へども眞の萬葉ふりにて人わらひあるもの候其うちをしいて取捨いたし三章一枝に加へ候へ

とも御覽のごとく、それ猶とものへりともかく、口ふさげあるしれごに候又長歌は感淺き事短歌にくらべては萬々に候さるべきいはれは大やうしれたる事か、さればしかよみ難きうへ、感薄き長歌よまんよりは口にあひたる短歌をと思ひとり、たまは人の望にてつゞり候事も有之候へども先はやめに致候(景樹筆話)  
 と云へり彼れの長歌に於ける技倆と意見とは此自白を以て概見すべきなり彼れが歌論の字眼は曰く誠實曰く調の二語に在り彼れの私淑する所は古今以後に在り隨て古今後の一變態ある鎌倉右大臣は彼れの罵詈して措かざる所に於して遂に「志氣ある人決して見るべきものにあらず況や是に倣ふべけんや」(新學異見)と云ふに至れり彼れは雄壯を以

て凡卑とし優美にして穉氣あるを以て雅韻とし  
雄々しく強きは質朴の體なるべし質朴の鄙しからんは  
理の上にして論なき事なり(新學異見)

と云ひ

歌はことわりにあづからずしらぶるものに侍ればすが  
た第一ある事に候がしらべは即姿なり其すがたは則け  
だかく優美にしていさゝかもあらくしき言葉を用ひ  
ず雅韻のみものしてかりにも凡卑のしらべに墮ざらん  
やう心がくべき旨先哲のをしへに候………歌しらぬ  
もげにとらあづくばかりにあらまほしきを古人も歌は  
をさなかれと申され候(景樹筆話)

と説けり意ふに誠實と云ひ調と云ひ其解釋を誤らざるに

於ては固より詩賦に於て緊要の事たり然れども彼れの解  
釋は甚だ偏頗せるを如何せん加之彼れの誠實と調とを説  
くや常に工夫と成迹とを混淆せるが故に其意義常に錯雜  
して要領を得ず甚しきは一文の中にも頗る自家撞着のも  
のあるに至る是を以て其親昵の門弟子と雖も種々に之を  
了解し景樹自身も其反問に遇ひて屢々窘迫せる状は其書  
牘に就ても之を見ることを得るあり之を聞く客あり嘗て  
英國の詞宗テニソン卿に向ひ其詩中の或二句を摘み「絶妙  
々々天與(インスピレーション)に非らずんば焉ぞ如此から  
んと歎稱せしに卿は馬鹿を云へ余は其二句の爲めに葉卷  
五本を費したり」と答しとぞ蓋し其句は所謂天衣無縫もの  
にして誠實も調も景樹の理想に適せし種類のものならん

而して之を案出するに卿は葉巻烟草五本を吹く間の經營  
 慘淡を費せしを云ふあり是れ即ち工夫あり景樹自身も嘗  
 て自然即ち誠實ありと(桂園遺文)解釋せることあるが洋人  
 の詩文を評するにも自然的(ナチュラル)とか姿態の閑雅(グ  
 レース)とか云ふ類の語あり然れども此等は皆出來上りた  
 る成迹の上にて就ての批判なり意匠の經營の經過即ち所謂  
 工夫の上にて就て云ふに非らず之を美術に考ふるに名手の  
 一像を刻み一物を畫くや愈々自然に近く而も愈々美術的  
 なるが即ち其名作なり然れども如此の作ほど其意匠の慘  
 淡は深かるべし詩歌も亦如此のみ工夫と成迹豈混淆すべ  
 けんや意ふに奇想天外來警句奇言の偶然飛來することあ  
 りに非らざるも是れ棚から牡丹餅的の談のみ論せずして

可なり景樹の歌學を論するや常に工夫と成迹とを混淆せ  
 り其論旨の一貫せざる所多き亦宜なり  
 彼れも工夫の上にては辛苦經營の必要を説かざるに非  
 らず例へば  
 同じ心同じ詞にても一字半言にて雅にも俗にもかたぶ  
 く事にてそれたちまち感不感のさかひに候、かるきに似  
 て、いたりて重き事に候(景樹筆話)  
 と云へる如き又  
 歌は熟案せずして佳句を得ん事は難かあるは、いふまで  
 も侍らず、とかく御詠輕忽に相見ぬ、そのかみの手ぶり、う  
 せ行て荒涼に趣くかたち侍るにや、やう／＼其氣味近頃  
 見ども候故其ふりのみ申入候也(景樹筆話)

と云へる如きは是れなり然るに又一方にては  
 歌は情のゆくまに〜ひとり調べなりて思慮を加ふべ  
 きものならねば古に擬似んとするの違あらんやもしこ  
 れを似せたらんはやがて飾れる偽のみ(新學異見)  
 と云へる類のこと屢々彼れの著書中に散見す古風を學ぶ  
 可否の事は暫く別論とし思慮を加ふべきに非らずと云ふ  
 如きは全く苦辛經營の非を云へるに均しく或者が和歌を  
 學ぶは無學あるがよしと論せしと殆んど擇ぶ所あからん  
 とす左ればこそ業合某に  
 ……よき人の教によりてよく成たる人もやがて飾  
 れる偽といふべきか此説のごときは人もあしき人はあ  
 しきにてあるがやがてよき人あり歌も生得てあしき歌

附言 本論中景樹筆話とあるは余が坊間にて獲たる寫  
 本の一小冊子にて表題は香川景樹筆話とあり詠歌奥書  
 書翰歌評等を集め中には桂園遺文中のと同ーのもあり  
 未だ刊本ありや否を知らず

(其十八)

景樹が其歌學の銘符とせる誠實と調べとを説明するに工  
 夫と成迹とを混淆せることは前既に之を概論せるも彼れ  
 の歌論は其粗雜なるに關せず頗る勢力を有せるにより余  
 は讀者の忍耐を請ひ今一層之を詳論せざるを得ず彼れは  
 又誠實と調べとを説明するに性情の二字を以てす就中彼  
 れの教旨を編纂せりと稱する内山眞弓の「歌學提要」に左の  
 如く記せり

歌よむ事を、技藝とひとしく思ふ人もああるは、あまりに  
わいどめなきことならずや、こは天地既に開闢て、神人化  
生し、神人化生するに至ては、性情なき事をぬす、されば、そ  
の性情の發動するまに、歌とよみ出給ひしより以來、  
しばらくも絶えざる道にして、技藝と日をおおしくして  
語るべからず、されば技藝は何にまれ、聲をとめ、法を習ひ、  
或は跡を見、形をうつし、大かたは師の風俗に似するをよ  
しとするものあり、歌はさにあらず、己が心の趣くにまか  
せられたれば、法もなく、式もなく、況や古歌によらむとすれば、  
ふるき俳たち、師の風を學ばんとすれば、たちまち似せ物  
とあり、詞をとれば、小盗とそしられ、意をうはへば、猶罪お  
もく。調をかすむれば、強盗とさげしめらる、また文辭を專

らにすれば、巧に落ちて、造花のごときをまぬかれず、たゞ言  
にては人感せず、感せざれば歌といふの甲斐なく、更にせ  
むすべなきやうのものあり、されば才藝の達人も博學の  
識者も、難しとする業ありかし、されども、名利の念をさり、  
只性情の誠を業として、分入らむには、おのづから進み安  
きこと、かへりて磯城島の道にしく物あかるべし  
是亦工夫と成迹とを混淆せりと云はざる可からず、意ふに  
詩は性情に基くと、は嘗て支那人の言ふ所にして、猶花に啼  
く鶯、水にすむ蛙の聲を聞けば、生とし生けるもの、いづれか  
歌をよまざりける、と云へるの類のみ名編佳作の成迹に付  
て云ふ時は、假令其人自家の境遇により感動せるものに非  
ず、即ち單に想像上より着想せるものにて、も能く人情を懸



ち其自然に適する以上は之を稱して能く性情の自然を得たりと謂ふべし詩賦は到底想像上の一現象に外ならざるあり去れば成迹だに性情に適へば豈其工夫の経過を問ふを要せんや景樹は此理を解せざればこそ前文の如き議論をも爲すかれ且つ詩賦を作るは其事既に工夫ものなり極々簡單の咨嗟歎息はいざ知らず少く長くして一文章をさすものは既に其思想に幾分の潤飾を加へたるものに過ぎず蓋し人類の事物を思考するは其常用の言語を以てするを常とす詩歌は既に常用言語の變態なれば豈所謂思ふがまゝと云ふことあらんや三十一字の短歌と雖も亦此理に外ならずと信ず勿論余も亦摸擬剽竊を可ありと云ふに非らず是れ自ら別論なるも彼れは性情と云ふは必らず自己

の性情の發動と解するが故に恰も想像上の工夫は不可ありと論ずる如きの結果を生じ遂に  
 見るもの聞くものにつけ、或は悲しび或は歡び、その事に物に臨みたらんをり、打付にあはれとおもふ、初一念をよみ出づるこそ歌あるべけれ(歌學提要)  
 など、説くに至れり隨て詩歌を作るを技藝と思ふは誤れりとの議論も出しあるべし蓋し詩歌は工學理學をど、其趣こそ變はれ又其超源の如何なるにせよ美術と相近邇せる一種の技藝あること疑ふべからず之を技藝に非らずとするこそ却て誤りなれ加之若し詩歌を以て自家の性情の感動の結果にのみ限り否らざるものは虚偽とせんとせば豈其發達を見るべけんや其れのみならず景樹自身と雖も

亦決して之を實行せず若し之に限るとせば桂園一枝の九  
 分通りは虚偽ならざるを得ざるべし戀歌の如きは殊に然  
 り戀歌は家居の風俗の異なる上世の實際の詠歌はいざ  
 知らず後世の作は概皆作者が暫く身を其境に置きたるの  
 想像を以て之を韻文とせしものみ而るも猶其能く人情  
 を穿ちたるものは之を性情を得たるものとするあり景樹  
 の戀歌と雖も亦蓋し之に外からざるべし其他の諸作も亦  
 此類のもの過多あるを知るべし  
 彼れの謂ふ所の誠實とは事物の真相又は眞理など云ふ如  
 き意味なきにも非ざれども或は之を眞心とも稱し多くの  
 場合に於ては心術上の事に用ひ心の思ふまゝと云ふ意味  
 に解せり隨て之を性情の自然とも解せるなり而して彼れ

は誠實と調べとは自ら別物の如く説けるかと思へば又時  
 どしては二者を混淆して同一物の如くにも説けるに似た  
 り(新學異見桂園遺文)是れ蓋し誠實と調べとは相待ちて其  
 美を濟すと説くの勝れりとするを知らざるに坐するに似  
 たり  
 彼れが誠實と調べとを論ずること如此に錯雜せるが故に  
 果ては左の如きの窮辭を爲すに至りしを笑止なれ之を  
 要するに景樹は議論には甚だ拙劣なりと謂ふべし  
 調べの事斐雄紀成連城眞弓等より御聞の所少異有之御  
 心感ひにて却て御詠出もむつかしく相成候由かつ調べ  
 は自己に備はれるものによ、學びて得るものによとの御  
 尋承候、勿論詠歌は思ふ事を述るのみなれば自己のもの

さらん事申すもさらかり古人も思ふまゝをいへば自然  
 に秀歌也といはれたるが如し、却て常の言語に調べのど  
 のはぬは更になきをもて知つべし、只すおほに思ふ事を述るの  
 外なし調べあへりや否やはたやすくみづからしらるゝもの  
 ならず、しらすゝかなふ事なり然るに御文中に餘り聞  
 ぬ易くよみ候へば有がまゝ、故只ごと、成餘情もあく勿  
 論感ずる程の場所を云々とあるは大なる意得違ひ也  
 足下聞ぬやすしとせらるゝ、歌みる人見侍らば却て聞ぬ  
 難きや又雅調ならんや、きはめて量りがたし、餘情もあく  
 感ずる場所なしと定めたる歌猶感有て餘情あらんも知  
 がたし自己にしらるゝものにあらず、只おのれは真心の  
 誠とやすらかに述出べし、其中にてよきはよく、あしきは

あしと世評自然に定まるべし、おのが心をおのが定むる  
 は至てあやふし、おのれ孝子也と思へる人はきはめて不  
 孝子也おのれ不忠也と思へる人に多く忠臣あり、さて真  
 心といふは、たとへば心慎める時はつゝしめる調によま  
 るゝが真心、戯れたる時は、たはれたるが真心、隠せる時は  
 かくすが真心、あらはせる時は顯はれたるが真心にて千  
 條萬端更に一定するものにあらず、此の真心だにたがは  
 ずば調べは是れにしたがひていさゝかも差ふべからず、  
 さればまづ真心をしらべ出して其調べのよしあしをば、  
 いたくかへりみるべからず、真心を述て調べのど、のは  
 ざるはいまだ真心を述得ざるもの也、又真弓が真心とは  
 道理をはづれたるもの也といへるよし、實にさる事に侍

古歌はをさあかれといへるは即義理にかまぼらぬ  
をいへりしかれども道理をはづすが眞心也といふには  
あらず眞心は多分道理にはづるもの也といふなりそ  
れやがて眞の又眞理なるもの也あかかしこ(景樹筆話)

(其十九)

余を以て之を見るに景樹翁にして誠實と調とを説くに工  
夫と成述とを分別したりしならば其論見るべきものあら  
ん且誠實とは事物の眞相の意あり調とは音調と姿態と  
を兼ねて云なりと説き而して誠實と調とは別物なるも相  
待ちて詩歌の美を濟すものなりと説かば更に見るべきも  
のあらん意ふに詩賦亦一種の技藝なり作歌の技藝たるは  
猶唱歌の技藝たる均しきのみ僻地の子守女も學ばすし

て歌唱す而も之が爲めおやうの清元も技藝に非らずと云  
はば人誰か之を笑はざらん既に枝藝たり則ち意匠の經營  
は問ふ所に非らず其成迹にして能く事物の眞相に適し且  
つ其調の完全を得ば則ち好作たるを害せず而して事物の  
眞相と云へば之を景色にするも之を人情にするも之を軍  
陣行旅宴遊起居にするも能く其自然を寫し虚偽に涉らざ  
るの謂にして其用廣く能く翁の論旨に適すべし調とは音  
調と姿態とを兼て言ふ詩歌のことなれば音調あたらか  
らざれば聞くに足らず姿態優美ならざれば見るに足らず  
と説かば是亦能く翁の論旨に適すべきなり  
然れども姑く翁の趣旨を右の如く解するも余は猶其論の  
完全ならざるを覺ゆ嚴正に解釋すれば音調とは樂器に施

して音律の能く整ふを謂ふべきなれども翁の意は其程まで  
 のことを言ふにはあらず即ち口に唱へて所謂ゴロの好  
 きを指す位のことあるべし而して翁が理想とする所はな  
 だらかしと云ふに在りて急促變幻にして常なきの處亦好音  
 あるを思はざるに似たり翁が理想とする所の姿態は優美  
 に在り雋爽奇警雄拔等亦各一の好姿態あらざる無く優美  
 は單に姿態の一たるに過ぎざるに思ひ至らざる如し彼れ  
 の論旨に據れば美術は美人畫に限り名將勇士の肖像の類  
 は美術に非らずと謂はざるを得ず天下寧ぞ此理あらんや  
 又事物の真相と云ふに付ても詩賦に在ては物理上に於て  
 分毫の虚實を計較する如きものにあらす元來詩賦は想像  
 的製産物と云ふべきものにて感情に訴へて如何にも尤ら

しく聞ゆるものは即ち實相を得たりと云ひて可なり嘗て  
 英人の詩(原語ポエツリ)を論ずるを見るに左の趣旨に説  
 けり

此語元來希臘の「創造する」製造する」と云ふ意味の語より  
 來る其後一變して人の想像上の産出物と云ふ意に用ゆ  
 ること、かれり其時代には韻文と散文とを分たす總て  
 想像の元素の多くして感情の發動を強からしむるもの  
 は散文をも此種類に包含せしかり其後又一變して嚴格  
 は云へば韻文のみを指すこと、なりたり而して韻文の  
 詩は之を三大種類に區別するを常とす即ち説話詩唱歌  
 及び院本是れなり此の外猶細分類なきにあらざるも教訓  
 詩及び皮肉滑稽詩の如きは想像的と理想的との原素の

甚だ 欠乏せるが故に之を詩の部類に入るべからずと論ずる者あり云々

此の意味を推究すれば事物の眞形情を丸出しに平板に卒直に書き下したるものゝ如きは之を詩賦と見ざらんと云ふに歸すべし其れ洋人の詩を論ずるや此の如きに至る即ち詩賦上にて事物の眞相とは如何あるものあるやは概見し得べし之を譬ふれば

燈火一點欺太陽  
 太陽の光にまがふ 燈哉

と云はば詩にも歌にもおらざるべきも若し感情にて尤らしく聞ゆるものは物理的に虚偽にても名詩賦となれるものは殆んど詩賦の大部分に居ると謂ふべし景樹自身にも

打かはず、雁の羽風に雲消て、

の如きは稍此類あるべし是れ豈物理的に眞實あらんや是れ豈彼れが眞面目の思想あらんや彼自身も實地に臨みて折々此類の作ありながら議論として此の意を解せざる故に唯心の思ふがまゝとのみ唱へ自家に思ふ所にあらざれば誠實に非らずとし其極遂に實景の吟咏の如きは最初一見したる際の初一念を歌とすべし第二義に渉るも不可かり(歌學提要)と云ふ如き説を爲すに至れり試に見よ上に示せる「打かはず」の一首にても彼れ若し月前の雁と初見參に眞面目にて雲が雁の羽聲に消亂したりと思ひしあらば彼れは必らず狂人ありしあらん要するに彼れの所謂誠

實は詩賦論としては其要領を得ざるあり

(其二十)

景樹は極めて俗言を重んじ古言を輕んず其説に以爲く詩  
賦の雅俗は音調に在りて言語に在らず調べに雅調あり凡  
調あり雅調にも甲乙の位あり最上の雅調は最上の感動あ  
るものあり最上の感動は端的の感動あり深く探りて幽玄  
を求むるは端的の感動に非ず而して端的の感動は俗言に  
在り詩賦は元來性情を述ぶるの外あし古言は自家の實賤  
する所のものに非らず故に古言を用ふるは誠實を失ひ性  
情に戻る其結果は徒に心を高遠に馳せ詞に華美を飾るに  
過ぎず今の雅言として貴ぶ所の古言も實は當時に在りて  
は俗言たりしのみ俗言の能く調に協ふは人各々其思ふが

まゝを述べて他人の聽に諛はざればなりとて其極遂に俗言  
平語に未だ調の協はざるものあるを聞かず幼者の詠歌に  
未だ調の協はざるものあるを見ず是れ幼者は俗言と雅言  
とを分つことを知らざればありと云ふに至れり(歌學提要、  
桂園遺文古今和歌集正義總論等に散見する所に據る彼れ  
の文章は甚だ蕪雜なれども要するに此意味なり)

彼れの立脚地より論ずれば此論一理あきに非らず鎌倉の  
右大臣は彼れの眼より視れば同主義者とも云ふべき定家  
卿も猶其愚秘抄中に於て深く歡賞せる所なるに彼れは罵  
言を極むるも亦彼れが右大臣は當時の俗言を棄て徒に古  
言を摸擬し性情を撓めて虚偽に陥ると云ふに在るあり余  
を以て之を視れば俊成定家等の詠歌と金槐集と詞の云ひ

廻はしこそや、相違われ言語其れ自身に付ては未だ一は俗言にして一は古言ありと云ふ如き大差違あるを見ざるも是れ姑く別論とし何故に俗言が最上の好調たるかに至りては余は大に疑ふ所なき能はず彼は深遠幽玄を以て詩賦の本所に非らずと断す其裡面を云へば真率淡泊を以て其本色とするものあり是れ大本に於て既に誤れり詩賦は感情に訴ふるものなり彼れも亦之を知らざるに非らず然れども彼れの所謂感情は甚だ淺近あるものありと謂はざるべからず俗言必らずしも深遠の感情を興へずと云ふに非らず時として之を用ふるも亦眞作家の希望する感情を興ふることもあるべし而も俗言は眞率にして稗氣を帶ぶ故に最上の感覺を興ふと云ふに至りては偏見と云はざ

る可らず古言必らずしも必要とは云はず意味も語勢も全く沈し盡き普通の讀者をして更に感情を動さしむること能はざる類のものは之を用ひざるの愈れりとするに若かざるべし而も其他のものに至りては古言と雖も何の賤むべきことか之れあらん其實言語の雅味は概ね反て古言に在り庭園を作るに古石と新石と孰れか雅味ある是れ少く風雅の趣を解する者の知る所あり詩歸の言語と雖も亦此理に外からず俗言は廣く通じ古言は少數人に通ずるのみなるを以て讀者の多寡を以て云はんとする乎是れ未だ言語の雅俗の証とするに足らず何とあれば俗言を以て作るる詩賦と雖も其道の心なき者に對しては馬耳東風に過ざればなり桂園一枝と雖も之を僮夫馬丁に聽かせなば



將た何の況味かあらん且つ又た同じ俗言中にても使用の  
 久きものと新あるものと士君子の間に用ひらるゝものと  
 否らざるものとの間には自ら雅俗の差あるべし是れ作家  
 の選擇に於て最も慎重すべきものたり言文一致の西洋に  
 於ても此差違は作家の常に注意する所たり之を要するに  
 普通の俗語は平板に陥り感情をして淺近ならしめ易く一  
 歩を過てば野鄙に傾き或は滑稽に類し易きものなり景樹  
 が詩賦の音調と姿態との至美は俗言に在りとするもの偏  
 見と云はざるを得ず復古學者が機軸を一變して維新の盛  
 業を顯はすこと能はざるのみならず換骨奪胎の運用を知  
 らず動もすれば摸擬剽竊に陥らんとせしは惜むべしと雖  
 ども之に反對して他の極端に走り淺近膚薄の性情を説き

不言の中に時世教に媚び遂に俗言を以て雅調の最上と爲  
 すに至りては實に一驚を喫せざるを得ず

景樹が長歌は感少く短歌は感深しとするもの亦偏見と云  
 はざるべからず若し短きが故に感深しと云はば芭蕉か誰  
 かの「一聲は月が啼いたか郭公」は後徳大寺左大臣の「郭公啼  
 つる方より感深しと云はざるべからず文晁の「我庭の雪か  
 ら續く富士の山」は道灌の「我庵は松原つとよき」より感深しと  
 云はざる可らず然れども「一聲は」も「我庭の」も好出來とは云  
 ひながら原作に比すれば已に其思想の幾分を減削せし丈  
 其感情は幾分を減せることは之を玩味して知り得べし蓋  
 し「一聲は」も「我庭の」も稍滑稽の氣味ありて雅味に薄きは頗  
 智を競ふ俳歌としては可あるべきも原作者の目的とせし

感情は決して茲に在らざりしが如し勿論三十一字の短歌は割合に深遠の思想を云ひ出し得ることには余も亦之を認め而も若し茲に長篇大作にして句々皆一の短歌同様の深遠の思想を言ひ出し得る大手腕を有する作家起りたらば如何若し又句々皆然らずとも短歌にて言出し得ざる雄大の思想を長篇大作を以て一の緩語なく儼氣なく詠出せば如何之を支那詩に考ふるに律絶中に名作なきに非ず之に比すれば平々凡々の長篇は固より讀むに堪へず然れども李青蓮蘇東坡あとの長篇大作は如何其雄渾活達の大思想は逆も律絶の小規模の企て及ぶ所に非らず和歌も亦如此のみ況んや三十一字の短歌は支那詩の一句乃至二句位に相當するに過ぎざるものあるに非らずや意ふに短歌は短

し故に瑕瑾を露すこと割合に少かるべし亦偶然名吟を得ることあき非らざるべきも長篇大作に至りては眞に大手腕を有するに非らざれば首尾完全の名吟を得難かるべし唯其得難きが爲めに之を排斥して感淺しとするに至りては眞の有力家の議論とは認め難し況んや短歌と雖も眞に深遠の感あるものは歴代集以下汗牛充棟の歌集中眞に寥々たる晨星にして其餘は概ね彼の河原の小石同様唯曇々として堆を爲すのみ隨て短歌は必ず感深しと云ふを得ざるに於てをや之を要するに歌學者としては景樹は甚だ論法に拙あるのみからず其主眼とせる誠實と調との事も新機軸の議論の如き觀をかさにあらざるも實は陳腐にして而も彼れの論ず

る所は甚だ詩賦の要義に通せざる所あるに似たり

(其二十一)

歌學者としての景樹は前數回に述ぶる所の如く甚だ敬服すべからず然らば作家としての技倆は如何と尋ぬるに彼れは第一に長歌を無視するが故に其規模の狭少あること論おしと雖も短歌に至りても亦吾人をして失望せしめざるを得ざるあり  
試に桂園一枝を緋くに

鹿まつと伊奈の伏原、ふしもあへず、

弓末ほのく、夜は明にけり、

眞をば、まだあらはさで、光のみ、

放てる鷺の、山の端の月、

の如きは稍氣力あるが如し此他之に髣髴たるもの若干首はあるべし又彼れの慣用の口吻あるべきも流石と思はるものにて

佗て世を、ふるやの軒の、繩すだれ、

くちはつるまで、かゝるべしやは、

鶯の、あかつきおきの、初聲に、

今はどしらむ、春の夜の月、

の類も素より若干はあるべし又懸詞は餘り貴ぶべきものにはあらねど能く言ひ廻したるは才氣の見ゆるものあり  
景樹にも

くれにけり、月すみよしの、濱出て、

夏忘れ貝、いざやひろはん、

つくづくどながめ入る日の影おちて、

色あき雲に秋風ぞ吹く、

の類若干あるべし然れども其大部分は例の「けるかな」歌甚  
だ多くして其句調の如何にも陳腐なるか否らざるも其用  
語の如何にも平凡にして趣味に乏しく風姿に乏しく随て  
感情の甚だ淺近なるもの比々皆是れなるに似たり是れ蓋  
し彼れの以て自然の調に適せりとするものあるべけれど  
も余輩を以て之を見れば決して詩賦の本領を得たりとは  
思はれざるものなり試に見よ

河岸にもゆる若菜は、青柳の、

山里の、梅のほづゑに、ふる雪の、

の類は彼れの集中に最も多き所あるが此等は何等の趣味  
か何等の風姿か將た何等の感情かある哉」と留めたる歌の  
中にも例へば

すむ月に、水の心もかよふらし、

高くなりゆく、波の音哉、

の如き余を以て之を見れば「波の音哉」を「瀬々の波のど」とか  
岩波の音と云ふ如き語勢の文字としたらんにはと思へ  
ども彼れの慣家法の「哉」を棄て得ざる爲め頗る氣勢の上ら  
ざるを覺ゆるなり其他此類甚だ多きに似たり  
彼れの詠歌は幾分の例外あるも大体は彼れの歌論を實行  
したるものなり即ち率然の感觸と平板の用語とを最上の

理想としたるものあり此弊や彼れに在りては流石に猶未だ極めて太甚しきに陥らざりしも彼れの餘風を繼續せる者に在りては殆んど見るに堪へず聴くに堪へず餘情も無く姿態も無く上出來の俳句にも劣らんとし滑稽然たる悪韻文の往々世に出るあるは疑ふべからざる事實たり若し前に引用せる英國の詩論家の論法を以て之を論せば或は之を詩賦の部類より排除せんも知るべからず守部の長歌選料に

むかし賀茂翁の頻りに古風を唱へられし頃ほひに其教子が師の心になへむとて、ひたぶるに古めかし殊更に身遠き虚語をぬりいで、わざと五七の格にそむけおとし、て、おのがじし、よみきそひき、今もをり、其ほどの詠草

ともものちり殘れるを見る事あるに其頃の歌の拙さよ、ただ古語の口まねのみにして却てしらべのど、のほらすを古風と心得たりしより、むげにふつゝかにて更に歌のやうにもあらずぞ見わたる、

と説き且つ翁は當時復古の學に熱心の餘り門生等の漸次自ら改善するを期し敢て矯正せざりし爲め此弊に陥りたりとのことを説けり其論固より一理あり然れども景樹の歌風は全く他の極端に走れり其弊の極まる所は復古派の末流と何ぞ選ばん否反て甚しきものあるあり余を以て之を視れば景樹流の歌風は繪畫を以て之を云へば猶四條寫生派が雲谷狩野一流の畫風の後に出来る如し寫生固より可なり而も筆勢と氣韻とは則ち大に劣れり否々寫生派猶

可かり動もすれば浮世繪派に陥らんとするを如何せん浮世繪も元祿以上は猶可なり豊國以後の浮世繪たらんとするを奈何せん

(其二十二)

既往に於ける和歌の盛衰長短に關し余が見る所は上來記述する所の如し然らば現今の情態は果して如何と云ふに事頗る目前に過ぐるが故に余は剴切に之を細論するを好まざるも概して云へば一面には景樹流の末弊次第に蔓延し淺近の感情と凡卑の風調とを以て賦賦の本色を掩はんとし一面には復古派の殘黨ありて景樹流に對陣するの氣勢を張るも彼等は復古流の壯圖を果すこと能はず纔に類題草野集の體相を嘗め結局古今以後の小模型中に彷彿して止まん

とし而して其中間に在來の舊歌風の餘睡を嘗むる者介立し己がじし壺中の日月を夢中に送り何れの派中にも未だ曠世の大手腕を揮ふ者あるを聞かず文化文政の諸歌人即ち本居父子村田父子兄弟蘆菴景樹等余を以て之を見れば素より大歌人とは信せざるも明治の今日は未だ之と且つ且つ鴈行する者だもあるを聞かず否否彼の籠手の上に走る世忘れ厚ぶすま、

かくしても忘れぬものは、そのかみの、  
三階の花に、高殿の月、

と詠せし餘事的歌人の黄昏少將(樂翁公)をだも凌駕する者あるを聞かず明治の文物盛あるも余は未だ和歌に於て大

振作せし所あるを見ず是れ余が方今の和歌界を觀察し  
 其衰態を歎息せし所以なり且つ余が言の誣妄に非らざる  
 は一月以來の諸種の新聞紙上に見はるゝ朝野諸名士の新  
 詠を一閱するも其一斑を證明するに足らん  
 余は素より萬葉を以て理想上詩賦の最上と云ふに非らず  
 萬葉は一般の文物未だ完全ならざるの時に成りしものな  
 れば辭藻の不足もあらん意匠の生硬もあらん故に理想上  
 の企望は素より之に超ゆること數等なるも我國二千有餘  
 年間の史上に於ては萬葉時代が詩國として最大の時期を  
 りしことは余が上來論證する所の如し責めては萬葉時代  
 と髣髴たるの一時期を見んことと和歌者流の及ばずながら  
 企つべきの事業なるべし但し余は固より摸擬剽竊を勸告

するに非らず能く換骨奪胎の工夫を廻らし新機軸を出さ  
 んこと肝要あるべし  
 詩賦も亦一種の技藝あることは前に既に之を論じたり世  
 人は毎に作家の境遇に基ける自然の感發より得たるもの  
 に妙構多きを説く余も亦之を認めざるに非らず蓋し詩賦  
 の最も人心を感動するは概ね悲惨の作意に多しとす而し  
 て悲惨の作意は身自ら流離因頓の酸味を嘗め盡したる者  
 に多きは自然の理あり然れども此等の故を以て直ちに詩  
 賦は自然の發動あり技藝に非らざるなりと云はんとする  
 如きは亦詩賦の本領を得たりと云ふべからざるも亦余が  
 已に論せる所にて明あるべし余は其道の學者が能く此意  
 を領し從來の偏見を抛ち活眼を開かんことを望む若し果

して然るに於ては歌學維新の大功を奏せざる迄も亦稍其  
面目を改むることを得んか與謝野君の言ふ所に依れば此  
三四年間の和歌社會は頗る前日に異なる所ありと或は然  
らん彼二三子が頗る憤發する所ありとのとは嘗て之を聞  
り余は諸子が益健在にして其志望を繼續し見べきの成迹  
を將來に遺さんことを熱望す冀くば他日余輩をして彼諸  
子も亦舊套の小窠中に蠢爾たる小運動をさせる依然たる  
吳下の阿蒙ありと歎息せしむること勿れ  
近年來所謂新體詩唱歌軍歌等の名稱を有する一種の作體  
世に出たり是れ蓋し舊風の和歌の陳腐を厭ふより起りた  
る反動あらん其作家の概皆和歌者流より云ば素人と云ふ  
べき者より出るも亦之を證すべきあり回顧すれば明治十

一二年間のことありき余英國に在りて彼國の唱歌七八篇  
を翻譯し洋詩の作例として故郷なる父兄に郵送したるこ  
とあり其體裁は今の所謂新體詩なりき其後幾も無く東京  
にて外山矢田部諸博士の誘導により新體詩の體裁も追々に  
り蓋し余と暗合と云ふべきか爾來新體詩の體裁も追々に  
幾分の變更もありて今は廣く世に行はれ時としては眞の  
和歌者流にて筆を爰に試むる者あるに至れるは幾分の進  
歩と云ふべきも一斑より之を視れば新體詩の作家は概ね  
和學を度外に置くのみならず和文學の道には甚だ堪能お  
らざる下宿樓上の先生連まで己がじし椽大の筆を揮はる  
ゝ狀況となりしが故に一般に痛く其品格を失墜せるは惜  
むべし之を要するに新體詩は未だ以て明治文學の光輝を



發すべきの程度に達せざるあり是亦學者の考一考すべき  
 所あらん  
 余の父兄は相應に敷島の道をもたどりたるも余は國歌を  
 作ることとは殆んど皆無と云ひて可あり是れ余が當世の歌  
 體を好まざるに因る余敢て學んで能はずと云ふには非ら  
 ず而も例へば余にして貫之の紅葉は夜の錦ありけり」と同  
 意匠にて「見る人おしに紅葉夜散る」と云ふ如き句を作りた  
 りとせば今の歌人は「見る人もなく散る紅葉か」と云ふ如  
 き句調に修正するに相違なく又若し余にして萬葉の「簾動  
 し、秋の風吹くと云ふ如き句調を新に案出したりとせば小  
 簾もゆらぎて、秋風ぞ吹くと云ふ如き句調に變更するに相  
 違なく要するに彼等自家の一定の摸型中に入らざれば彼

等は之を是認せざるの風あり此等に屈從するは余の堪へ  
 ざる所あり去りて彼等を壓倒して其口を噤せしむる大  
 作家とあることも余の敢て企圖する所に非らず故に余は  
 國歌を作るを習はず惟大局より歌道の如何を論ずるは聊  
 か余の抱負あきに非らず是故に今長文を顧みず此和歌論  
 を草して大方の是正を問ふ余は固より歌學に精通せるに  
 非らず又眞理の發露は余の最も希望する所なれば余の論  
 旨の不備若くは錯誤ある所は識者宜しく假借する所なく  
 補正論駁せらるべし萬一余の所論にして聊か斯道に裨益  
 する所あらば余が望外の幸なり聞く與謝野君は斯道に志  
 あり且つ大に春秋に富むと果して然らば前途猶悠遠あり  
 切瑳琢磨能く大成を期し給へ

丁酉二月九日 西京圓山の最高樓梅ヶ枝の羈窓下に於て稿了

詩歌問答十則

郷内春蔭氏は岩手縣一の關人なり頃者書を予に寄せ  
詩歌に關する疑問十則を掲げ予の所見を叩く予は氏  
と一面の識あるにわらず又歌學を以て自ら任ずる者  
にわらず然れども其請の切ある之を等閑に附するこ  
とを得ず乃ち此一篇を草して以て與ふ  
(第一問)形式の一定したるものは年代を経るも其進歩發  
達に限りありて或は却て退歩するの嫌なき歟譬へば書  
畫の如きも亦同じ  
(答)形式とは如何あることを云ふや又事物によりては同く  
形式と云ふも其趣の異同あるべし隨て豫め其意義を一定

するにあらざれば一定の答を爲すこと難しと雖も茲に云ふ所の形式とは例へば詩歌書畫の類に關して云へば其の外形に付き或る一定の様式を備へて後人の標本とする如きことを云ふものと見て答へん貴説の如く形式の一定したるものは變化の餘地なきが故に進歩の度に限りあるべし物によりては却て退歩を助くることなきに非らざるべし何となれば天稟の英才も舊例古格に拘束せられて却て収縮に陥るべく素より新機軸を望むべからざればなり繪畫に於て後世の土佐狩野の門派等が其の古大家の遺法を守抹し所謂様式の末に彷徨して嘗て見るべきの傑作を出さず遂に依樣畫胡蘆の嘲りを免れざる如き實に是れあり詩歌に就て之を言ふも五七五七七の五句を以て一

篇とすと云ふが如き形式を設け之を作法の標準とし變化の餘地を存せざるに於ては雷同陳腐のものと續出すること多きは自然の理あるのみならず之を其沿革に徴するも亦實に然りとす其實和歌衰退の大原因は區々たる小形式の末に偏安せしに在ること生が信じて疑はざる所あり是れ復古派の諸彦も亦能く之を看破せるに似たり然りと雖も形式と云ふことは解釋次第にては凡百の事物に於て甚だ肝要の事柄あり殊に詩歌に於ては自ら詩歌の詩歌たるべき或る形式なきに於ては詩歌にして詩歌をなさざるべし要は唯其範圍と性質との如何に在るのみ此事は猶後文に就て悟らるべし

(第二問) 詩歌の高尙あると否とは言語にありて形式には

關せざる乎  
 (答)詩歌は元來言語を以て組織するものあり故に言語にし  
 て高尚からざれば其詩歌の高尚からざるべきは無論なり  
 然れども詩歌は自ら詩歌たる形式あり若し詩歌にして詩  
 歌の形式を備へざれば是れ詩歌にあらす隨て言語は如何  
 に高尚あればとて是れ言語として高尚あるのみ詩歌とし  
 て高尚あるに非らず故に詩歌の高尚と云へば能く詩歌の  
 詩歌たる所以の形式を備へ而して其言語の撰擇能く其能  
 事を盡したるものを指すものと解すべきに似たり但高尚  
 の言語と云ふは難解稀有の言語を指すの謂にあらざるは  
 勿論にして尋常普通の言語にても其配置の如何によりて  
 高尚にも卑近にもなるあり支那詩を以て之を例せば杜工

部の國破山河在城春草木深一字毎に之を見れば悉く尋  
 常普通にあらざるあきも其湊合の成迹に於て千古の名句  
 と稱せらる何國の言語に於ても皆斯くの如くあらんのみ  
 (第三問)五七の調即ち長歌の如きは冠辭を用ふるが爲め  
 に高尚あれども七五の調即ち今様體は五七の調に比し  
 一等を下るの感あるは如何  
 (答)本邦古代の長歌は五七の調なりしに何時の頃よりか七  
 五の調とあり眞淵一派の作も依然之を踏襲したる爲め其  
 調下れりとの論は委く長歌選格に見ゆ何人かの著書に古  
 代の長歌は五七にて冒頭に冠辭を置く爲め高尚雄壯なり  
 と論せしものさへありしかと覺ゆ冠辭は概ね五言なれば  
 五七の調あれば之を用ふるには便なるべきも七五の調と

て之を用ふべからざるにあらざる其實七五の調にて之を用ひたるもの比々として之れあり俗曲の「かゝれどてしも、鳥玉の世のあぢきあさ、身ひとつに、結ぼれ解けぬ、片絲を、くりかへしたる、獨り言」(世と夜と違へるにせよ)は誰も知りたる所にて後世の長歌に用ふる所も亦概ね之れと同一体裁なり冠辭其物が果して長歌の精彩を加ふべき好材料たらば七五の調に冠辭を用ふるも亦精彩を加へざるべからず加之五七の調は果して上品あるものならば冠辭を假らざるも亦他の理由により上品なることを得べし守部の論ずる所にても必ずしも冠辭の爲めに高尙なりと云ふにはあらず例へば五七の疊對は七五の疊對より高尙なりと論ずる如きは冠辭に關係する所なきあり左れば七五と五七と孰

れか高尙あるかをば姑く冠辭に關係なきものとして之を論せんに西洋にては或る韻脚法に基ける形式は何國の語には適せずと説けるあり又同一國語中にては何體の形式は雄壯活潑の思想を發するに適し何體の形式は優美高尙の情緒を述ぶるに適す其何故たるを知らざるも吾人の良能(インステンクト)にて自然に斯くの如く感覺すと説ける類あり是れ蓋し其國語の性質上發音の調子にて多年の經驗より來りて自然に此感覺あるものあるべし本邦語の性質上にも五は其音短き故に自然急調に屬し七其後に來るが故に五七は自然雄壯にして之に反し七は五に比すれば其音長くして緩に五其後に來るが故に七五は雄壯よりは自然流暢に屬し寧ろ優美の性を帶ふと云ふ如きの理由に

てもあるか併し予は未た之を確言すること能はず予は寧ろ雄壯と軟弱との區別は作家の手腕如何に因ること多きもの信せんと欲す少くとも五七と七五とを以て其性質上一は高尚にして一は野鄙なりとの差違あるものとは信ぜざるあり將又冒頭に冠辭を置くが爲め高尚と云ふ如き論の取るに足らざるは多言を待たず萬葉中の古長歌にみ冒頭に冠辭あきは幾首もあり其實如何ある意味なるか譯も分らぬ冠辭を冒頭に置く如き古風は今後の作家に在りては先は一思案物あるべし隨て守部が「短歌にすら麗はしきものには序語枕詞等あり長歌にして之に相應する稱言發言あとの無かるべきや」の趣意を説けるは反て偏僻を免れざるに似たり將た今樣體に冒頭より直に七五の調を

用ふる爲め長歌に在りては起句は必ず五言ならざれば無下に下品ある如くに思ふも余輩の活眼を以て之を見れば起句に七言を用ふとも作家の手腕次第にては隨分名篇を得らるべし今樣體に或は繊細優美あるあり或は粗笨活潑あるあるも皆是遺辭の如何に在るのみ冒頭より七五の調を用ひたりとて豈之れが爲め下品なるの性質を有せるもの断すべけんや要は唯手腕の如何に在るものと如し更に一步を進めて冠辭に關する鄙見を述べんに散文は言ふまでもなく韻文と雖も詞章は元來言語を集めて組織せざるものあり隨て其中に無意義の字句を混淆せば其字句丈は無意義の言語なるが故に論理上已に詞章の能事を盡さざるものと云はざるべからず本邦歌語の所謂冠辭即ち枕

詞は後世に至りては大抵皆無意義の字句に過ぎざれば成  
 る丈之を用ひざるこそ詠歌の本意ならめ然るに世の歌人  
 等は事茲に出でず好んで冠辭を挿入するの僻あり香川景  
 樹は詠歌は率然の感を貴ぶと云ひ俗語を貴ぶと云ふの論  
 者あれば先づ冠辭の排斥をこそ唱ふべかんめるに奇怪に  
 も冠辭は歌の章を爲し調を整ふるの良材ありとして非常  
 に之を尊重せるは渠れが議論の自家撞着の一にも數ふべ  
 きか景樹だに如此なれば其他は推して知るべし俗曲中忠  
 臣藏の「月の入る山科よりは一里半」の如き梅の春の「春景色  
 浮て鎌芽の一二三」の如き「月の入る」春景色は恰も雅調の冠  
 辭に髣髴たれども是其字句の意義大に其表面に顯はれ其  
 場合に適し効用を奏す雅調の冠辭も若し如此の効用あり

て能く人の感情の發動を助け得るものあらば之を用ふる  
 も可からん意ふに多くの冠辭は記紀萬葉時代に在りては  
 其意義も曉り易くして「月の入る」春景色「同様の感覺を與へ  
 しからんも知るべからざるも但し其頃よりして已に牽強  
 附會の意義のものもありしならん星霜の悠久に伴ひ當時  
 の意義は殆んど皆亡失し去りたる如し是故に眞淵の冠辭  
 考を細くも概皆牽強附會の解釋を以て繼に其意義を通ず  
 るのみ之を概言すれば方今の國語として冠辭は殆ど悉  
 く無意義の字句なりと謂ふも不可あし鳥が啼く東足引の  
 山、烏玉の夜の如きものにして慣用の多きと其普通語とし  
 て解し得べき意義の平易あるとにより「月の入る」春景色「の  
 類と粗同感覺を與へ得べきもの僅々あるべし已むを得ず

んば此等のものとみに限り極めて稀に之を用ふるも可ならんも全局より論ずれば冠辭の濫用ほど和歌の風神氣魄を没了するものはあし是れ作家の大に省るべき所あり

(第四問) 泰西諸國の詩には句の長短に關らず一定の形式ありや

(答) 泰西諸國の詩にも無論詩の詩たる所以は自ら其形式あり之なければ初めより詩を爲さざるなり實は原語を以て説明するにあらざれば隔靴搔痒の感を免れずと雖も試に其梗概を叙述せん英語に普通文章をプロース(文語)と云ひ詩賦の文章をヴァルス(韻語)と云ふ支那にて韻語と云へば句末に韻を押したるものを指せども英語に韻語と云ふは譬へば支那詩の平仄の如く發音の長短聲を或る體裁に排

列したるものを云ふ而して又句末に押韻したるものと否らざるものとあり隨て韻語に押韻と無押韻との二種あり通例の詩歌は概ね押韻にして無押韻は院本其他非常の長篇の記事体のものに用ふ支那は單音語なるが故に一音一語を爲す隨て一語毎に平若くは仄の一聲を成す而して平に上下聲あり仄に上去入の三聲あり英語は複音語あり隨て一音一語に限らず數音一語のもの極めて多し其趣は日本語に略相似たり例へば支那にて鳥と云へば一音あれども日本にて「からす」と云へば三音となり支那にて紅と云へば一音あれども日本にて「くれない」と云へば四音とあるかり是れ日本語も亦複音語あればあり而して英語に在りては此各音の發聲に長短の別あり文典をどに詩の形式を論



するときは此長短の區別を形容するに「」の符號を用ふる  
こと猶支那詩學に○●を用ふるど一般なり故に英語にて  
も一音一語のものには一語にして一の「」又は「」を有する  
まであるも數音一語のものは其音の長短及び音の數に應  
じ一語にして數箇の「」又は「」を有するなり此符號の安排  
の如何によりて詩歌は出来るなり例へば

又は「」  
或は「」  
又は「」  
の如し而して此長短聲の排列法は種々ありて文法家など  
は其れ「」に名稱を有せるも今之を詳説するの要なし且

又此安排法には混合體あとの變態もあれども變態は變態  
にて其中に亦自ら規律あるなり此安排法にして其の宜き  
を得ざれば名は詩と稱するも音調を爲さず隨て詩を爲さ  
ざるなり支那詩に在りては古詩には平仄ありどか無しと  
か學者の論も甚だ曖昧ある位にて要するに長篇に在りて  
は平仄の規律は甚だ嚴整からざる如きも英詩に在りては  
短篇長篇を問はず長短聲の安排は極めて緊要あるものな  
り  
更に一步を進めて説明せんに支那詩に韻脚と云ふことあ  
り英詩にも「フット」(即ち韻脚)と云ふことあれども支那詩に  
於ては句末即ち押韻の處を指し英詩に於ては或る二三音  
の「」を「」と稱す例へば「」又は「」又は「」又は「」又

は（一）の如し故に無論句末句頭等の意を含蓄せず而して英詩の句の長短は語数を以て算せず韻脚の数によりて算す英詩のメートル（調）は韻脚の種類と韻脚の数とによりて各其名稱あり即ち「イアンブス」と稱する韻脚の多きものは「イアンピツク調」と稱し一句三韻脚にて成れるものは「スリメータル」三メータル即ち三韻脚調と云ふの類あり其他推して知るべし又一句に用ふる韻脚の数は種々あるも多きも概ね七八韻脚に過ぎず慢然長きに失すれば詩調を失ふなり但し茲に句と稱するは東洋詩と比較の爲め簡便の名稱を用ひたれども實は句と云はんより行（ライン）と云ふを當れりとす何となれば西洋詩は行を以て之を區別し意味に至りては往々一句の中央より分割したる如きものあり

ればあり唯西洋詩の一行はや、東洋詩の一句に相當するにより句と稱するも論理に於て妨ぐる所あり英詩は又稍長きものは概ね或る行数毎に解を分つ支那古詩に解を分つと畧ぼ同じ但支那詩に在りては毎解の句数は相同じきもあれば同じからざるもあり英詩に在りては説話的長篇中などの異例を除く外毎解概ね同数なり又一解中の句の長短は一定せず又句数も一定せず又句数は奇數なるもあり偶數あるもあり然れども毎解の體裁は彼此同一なるを例とす例へば第一回が五句あれば第二回も五句第一回の起句が四韻脚にして結句が五韻脚あれば第二回も亦起句が四韻脚にして結句が五韻脚なるの類あり以上は専ら英詩に付て云ふ所あるも予が知る所の歐洲

諸國語の詩亦皆同一の主旨に歸せざるはなし  
 右の如く泰西諸國の詩にも自ら一定の形式あれども變化  
 の餘地は其中に緯々として存せり普通の和歌の三十一字  
 を以て一定の形式とせる如き偏隘千萬のものは未だ嘗て  
 之を見ざるなり但し貴問中の「一定」の二字は如何なる範圍  
 を指すか泰西詩の規律と雖も一定と云へば一定あるも而  
 も其變通の境域は甚だ廣濶あるを以て恐くば貴問の所謂  
 一定とは自ら別あらんかど信ず  
 附言 押韻及び平仄に付き猶一層説明すべし印度及び  
 亞刺比亞の詩には上古より押韻ありたりと云ふ希臘詩  
 及び羅馬盛時の羅甸詩には押韻の法なく平仄のみを以  
 て調を整へたり偶々押韻らしきものありても寧ろ偶然

の變例に過ぎず羅馬帝國が歐北蠻人に攪亂せられたる  
 後に及び羅甸語は其正音を失ひ詩調を整ふることの困  
 難あるに及び僧侶等が讚神詩を作るに押韻のことに案  
 出し次第に發達して西歴第四世紀の末葉に及び其體裁  
 始めて整ひたり隨て羅甸語の變體ある佛蘭西伊太利西  
 班牙等の國語の詩にも押韻法の盛行はるととなり  
 たり英國に在りては古代サキソン時代の詩には平仄も  
 なく押韻もなく唯奇異ある同發音排列法アルリテレ  
 シオンありて普通文との差異をなせしのみ同發音排列  
 とは例へば人丸の芳野宮の歌中に「神あがら神さびせず  
 と云々高きのを高知りまして云々」とある又櫻痴居士作  
 唱歌中の勝ちに勝ちたる勝ち軍とある類のことにて是

亦一種の押韻法と云ふを得べし其後ノルマン人が大陸より侵入して之を征服し言語も大に變化するに及び彼等が後世の羅旬語より摸し來りたる平仄及び押韻法を英詩に注入するに至りたるなり平仄とは支那の名稱を借用したるまであるが希臘羅旬語等に在りては發音の分量に付て之を云ふ因て之を長短聲と稱す英語に在りては實は長短に在らずして「アクセント」に就て之を云ふ因て漢語にては寧ろ抑揚と云ふ方稍邇し併し英國の文法家も矢張り希臘羅旬と同名稱を用ひ「アクセント」あるを長音と稱し之れを短音と稱す將又押韻(ライム)の字義に付ても變遷あり且つ必ずしも句末に限らず一句中に押韻するあり唯最も普通に指す所は句末の押韻に在

り而して其法は二句押韻三句押韻或は隔句押韻又は四句一解とし初句と末句とを同韻とし中二句を同韻とする等種々あり支那の押韻も古詩或は賦體等を通觀すれば種々の法あり其趣稍相似たりと知るべし日耳曼語に於ても古代の詩調は同發音排列法を以て之を整へたること又其平仄は今も猶長短にあらすして抑揚にあること英語と殊なることあり是れ日耳曼語は元來固有英語の淵源なれば左もあるべきことあり押韻の要不到に付ては西洋各國にても嘗て随分議論ありて野蠻時代の發明に過ぎず寧ろ希臘羅馬の古文明に復し之を廢して可ありと論じ無押韻の作を試むる者多かりしも伊多利西班牙に於ては遂に人心に投せず佛蘭西に於ては殊に

甚し蓋し言語の性質之なれば詩調を爲すこと難きを以てなり且つ佛語の如きは發音の抑揚の甚だ細微なるが爲めに押韻せざれば殆んど詩と文との區別を失ふに至る是れ無押韻詩の決して成功せざる所以なりと云ふ説者乃ち押韻の利を論じて以爲らく押韻を認めて單に詩句の虚飾となすは誤れり押韻は第一に音曲と好調和を爲すのみならず各句各解の始終を明晰にし随つて調子の精確融和を得ること平仄のみに依頼するより多し希臘詩及び羅句詩は發音の長短に依頼して調を爲し緩に押韻に依頼せざることを得たるも實は押韻法を知らざる爲めに頗る苦み其代りに彼等は句末に「ダクチール」(一長音二短音)又は「スボンデー」(二長音を用ひて句末解

未を分つのに供せしも其用法も蕪雜にして良成績を収めず隨つて之を聴く者をして一たび一句の結末を失ふ時は殆んど再び次句以下の段落を發見すること能はざらしむ後世の無押韻の作の人心に投せざるも蓋し主として之れに因るからん英語にても無押音の詩は感動薄くして人心に投せず其の長篇中に生存するは蓋し古學崇拜の餘癖によりて纒に維持せらるゝに過ぎざるに似たり只日耳曼詩に在ては押韻の必要を感ずること極めて少きが如し是れ蓋し日耳曼語の性質は長短抑揚著るしき爲めあらんと、  
 (第五問)本邦古來の韻文は盡く五七の調或は七五の調より成る若し之を排斥すとせば之に換ふるの調如何

(答)本邦韻文中にも字餘りもあれば字足らずもあり又七七  
と續くもあれば五五と續くもあり必ずしも五七又は七五  
とは言ふべからざるも大體は貴説の如く五七又は七五と  
云ひて可あらん之を排斥して他に之に換ふべきものあり  
やは頗る困難の問題なるべし前文にも云ふ如く洋詩にも  
支那詩にも平仄の音あり便宜の爲め洋詩の韻脚法をも假  
に平仄と稱す又句末押韻の法あり是れ其發音の如何に基  
くものにして之を以て調をなす故に洋詩に在りては無論  
五七等の制限を見ず支那詩に在りては五言又は七言が詩  
の通例あれども是にも別に平仄及び押韻のことあるが故  
に五七の類によらざるも随分韻文を作るの工夫あきにあ  
らざるべし現に長篇に在りては長短句錯綜のものも頗る

多し然るに日本語は言語に殆んど抑揚長短の變化あし幾  
分かこれあるも甚だ稀に且つ其の差の在る所徴にして之  
を以て音調の基礎とあすに適當るものなし蓋し本邦語中  
には單立の子音あく語源に遡らば上世は或は之れありし  
からんも後世は己に其痕迹を留めずと云ふとを得べし又  
隨て各音は概ね母音に終らざるあしと云ふを得べく母音  
の響非常に多し(ン)の一字のみはム。カ。ヌ。カ。實は何れども付  
かず稍論すべきの餘地あるも是とてム。カ。ヌ。カ。實は何れども付  
張母音を合む此等の主因に因り本邦の言語は極めて平坦  
にして抑揚長短の變化極めて微あし隨て平仄の別なし又  
押韻とすべき音あし俗歌中に偶々押韻に類するものあき  
にあらざるも是れ寧ろ稀有の異例にして一般に云ふとき

は押韻は決して本邦韻文の要礎にはあらず香川景樹が「し  
 らべ」と云ふことを説き同じことあがら久方の月と云ひて  
 調のよき場合と大空の月と云ひて調のよき場合あること  
 あど云ひ此意を承けて八田知紀は喉音の多き歌は其の調  
 高雅にして齒音の多きは其調卑俗なり(しらべの直路)など  
 説けるも其論甚だ茫漠として支那詩西洋詩の平仄押韻を  
 どのことと其趣甚だ殊なり然るが故に一面より云ふとき  
 は本邦の韻文は之を作るにも樂譜を作るにも平仄と押韻  
 の必要なき丈は比例的に容易なる所ありと云ふことを得  
 べし唯其之れあきは本邦韻文の發達の上にて幸か不幸  
 かは自から別問題とす而して本邦の韻文に在りては五又  
 は七の音數は歌唱上自然の音調を爲し恰も洋詩支那詩の

平仄押韻を以て詩調を爲すに相當せり故に予を以て之を  
 見れば本邦韻文にして若し五又は七の音調を根本より排  
 斥せば散文と韻文とは殆んど區別すべからざるに至らん  
 を恐る勿論古歌中にも既に旋頭體及び之れより分岐せる  
 混本體雙本體の類は同じ五又は七の音數を用ふるにも普  
 通の五七若くは三十一言の五七五七七の例に據らざる所  
 あり又俗歌には是亦同じ五又は七にて其排列は種々の  
 變體あり左れば雅歌に於ても其排列法には猶工夫の餘地  
 あるべきか加之洋詩體の如く段階を分ち適宜の排置を爲  
 し又或は段階の始め若くは終りに異例の長句又は短句を  
 置く如きの工夫は之れあらんか要するに拔群の手腕家世  
 に出なば新體を工夫しあがら名吟を詠出することあらん

かなれども五又は七の發音を本邦韻文の基礎外に排斥し  
 猶自然に韻文の形式を備ふることは蓋し難からんと想像  
 す本邦語に押韻又は平仄を工夫する如きは無要の至りな  
 り但嘗て櫻痴居士の俗曲を論ずるを聞くに「ア」音の多き句  
 は陽氣にして快活あり否らざるものは陰氣にして沈むと  
 云へり「明治三十年一月一日日々新聞中櫻痴一家言」八田  
 翁の「うたふには喉音多き歌調高く心ゆくありしらべの直  
 路」と云へるも略之と相似たるの論あり此等は世の作家た  
 る者宜く音曲家と謀り深く之を研究し實地果して然りと  
 せば將來之を一の指針と定め其意を以て作歌する如きの  
 工夫を廻らして可あり  
 (第六問)何れの國にても多少言語の變遷あるべけれど我

邦の如く古言雅言俗言各々の言語を混同して綴り  
 又は一種のみを以て綴るや如何  
 (答)西洋各國皆言語の變遷あり隨て古今其意味の變化した  
 るもあれは古に通じ今に通せざるもあり綴字法の如きは  
 概皆變化せり而して各時代の詩人は皆其時代の散文に用  
 ふる所の言語を用ひて詩賦を作るを例とす(偶々擬古の爲  
 め特に作る如きは自ら別なりと知るべし)蓋し言文一致の  
 國に於ては言語の意義及び綴字法は散文に用ふる所のも  
 のは即ち之を詩賦に用ひて其雅馴を失はざるのみならず  
 詩賦も亦言文一致の實を失はざるが爲めに能く讀者の感  
 動を惹き得るあり但し是に付ては一言せざるべからざる  
 ことあり第一には言文一致と云ふも如何ある言語も直ち



之を文章にすと云ふの意にはあらず「スラング」(嘲笑的  
 の俗語)「ダイアレクト」方言或は一地方のあまゝり若くは民  
 間野鄙の俗言乃至未だ廣く士君子間に行はれざる生硬の  
 言語の如きは或る目的の爲め特に之を挿入する如き稀有  
 の場合の外は之を上品なる文章に用ふることも無し隨て散  
 文に用ふる言語は之を詩賦に用ひて雅馴を失はざるあり  
 第二には詩賦のことなれば普通の文章又は日常の談話に  
 用ひざる古語も幾分かは之を用ふることもなきに非らず併  
 し是とて今人の耳には意味をも有せざる如き死語の類に  
 はあらずと知るへし第三には時として外國語あを挿入  
 することあるも是も貫之の女が「勅あればいどもかしこし、  
 鶯の」と詠じ爲家卿が「かきながす、巴の字の水は、跡たねて」と

詠じ慈鎮和尚が同く「かきし巴の字の、春の夜の夢」と詠じた  
 るの類に過ぎずと知るべし其他にも徃々方言俗語あをを  
 挿入すること必無とは云はざれども此等は寧ろ或事情に  
 際し或る目的の爲め特に挿入せるものにて寧ろ變例と見  
 るべきあり  
 右にて泰西詩人が用ふる所の言語は如何なるものなるか  
 は略ぼ了解せらるべし顧みて現今の本邦を見るに大に言  
 語及文學の状況を異にせる爲め詩賦に用ふべき言語の選  
 擇に至り頗る困難を感せざるを得ず併し予の見るところに  
 は日本語にも雅言にして同時に今人の間に行はれ又廣く  
 文章にも用ひらるゝもの實に無數とす例へば  
 風吹けば、沖津白波、たつ田山、

夜半にや君が、ひとり越らん、

を語毎に分ちて見よ孰れも皆奈良時代の慣用語あるに拘  
らず今代の言語にも普通にして又廣く文章にも用ひらる  
ゝものゝみ斯る言語を選択するに於ては決して雅馴を失  
はずして奇古難解に陥らず且つ能く讀者の感動をも引く  
に足らん而して假名遣の變化したるものは今體に隨ひ例  
へばはるばるとせずしてはるばるとし又外國傳來の言語  
を挿入する如き場合は貫之の女が「救あれば」と詠せし心を  
以て極めて之を慎重にし寧ろ之を變例とする位なれば即  
ち方今の韻文の最良あるものを得ん乎予の見る所を以て  
すれば古言雅言俗言を蕪雜に併用し剩へ交ふるに多くの  
外國傳來語を以てする如きものは感情を惹き難きのみか

らず動もすれば俳諧滑稽然たる惡姿態を現出し詩歌の本  
色を失ふに至るを恐るゝあり

(第七問)詩は形式の如何にあらずして内容の如何にあり  
と云ふ説

(答)本問は讀んで字の如く解釋するときは其當を得ずと答  
へざるを得ず何となれば詩にして詩の形式を備へざれば  
是れ詩に非らず大學之道、在明明德、在新民、在止於至善、は支  
那學者より云へば至深至遠の名語あるも若し之を詩とし  
て云へば半文錢の價値なし何となれば此文は初めより詩  
の形式を備へず即ち詩と云ふものに非ざればあり随て詩  
は詩の形式ありて始めて詩たることを知るべきなり但し詩  
は意義の深遠誠實を貴ぶ寧ろ外形の淡泊粗朴に失するも

内容の深遠誠實を得れば浮華輕佻にして人為的痕跡を留  
 むるに勝ると云ふ如きの意味なりとせば是れ固より一論  
 にして頗る肯綮に中れりと云ふべきあり  
 (第八問)詩を吟詩と讀詩とに區別して小説を讀詩とし普  
 通の叙事詩抒情詩戯曲を吟詩と爲すの當否  
 (答)是れ詩の意味を廣義に解釋したるものあるべし生は嘗  
 て春在流鶯聲裡詩と云ふ句さへ作りしとあり蓋し小説は  
 元來想像に基き其用ふる所の言語の撰擇も韻文の言語と  
 相同じきもの多きを以て此點より之を詩と稱せるなるべ  
 し此論法に據れば散文中にも亦詩と稱すべきものあるな  
 り其實英語の詩即ちポエツリーと云ふ語は元希臘語より  
 來り往古は散文韻文の區別あかりしことは生が嘗て述べ

し通りなるのみならず廣義に云ふときは想像より出で而  
 して其姿態の韻文然たるものは詩と稱することを得べし  
 併しながら後世普通の名稱として詩とは韻文を指す散  
 文中に詩に似たる文章あれば之を詩賦然(ポエチック)と云  
 ふも直ちに之を詩とは稱せず今左に詩と文との差を概論  
 せん  
 英語に普通に「ポエツリー」と云へば最も廣く詩賦體の文字  
 を指したる名稱なり「ポエム」と云へば稍狭くして詩篇とで  
 も譯すべき歟即ち某氏の某「ポエム」と云へば某氏作の某題  
 の詩篇と直接に其詩篇を指すに當る此場合には「ポエツリ  
 ー」と稱するは却て不穩あり又「ポエツ」と云へば詩人と云ふ  
 に當る扱又「ポエツリー」は「ヴァルス」を以て組織するを通例

とす「ヴァルス」とは言語を數行に排列し或形式に聯續せる  
 類似音聲(即ち韻脚)の幾回か反復して相呼應する所あるも  
 のを云ふ即ち韻語と譯すべきものなり而して英詩の韻語  
 には押韻のもの多し無押韻のもの多し前記述べし通り  
 なり通例に詩と稱するは此韻語の体を具へたるものを云  
 ふ又言語の上より詩文の區別を論ずれば詩は文法家の所  
 謂「フイギユル」を用ふること散文より多く且つ詩には日  
 の談話又は通常の散文に用ひざる古語をも往々之を用ふ  
 る點に於て異なるあり此の「フイギユル」と云ふことは比  
 形容及綴字の變例を包含せるものにて適切な譯語なきを  
 以て左に之を説かん  
 文法家は「フイギユル」を三種類に大別し又之を種々の小種

類に細分し各々其名稱を付せり但し原語を示さずして之  
 を詳説するも反て煩に涉り了解し難きを以て唯其梗概の  
 みを記すべし

第一類 言語の常形を變じたるもの即ち綴字法を變じ  
 假名數を増減したるもの是なり近く譬へば和歌にて「ニ  
 ヲアリケル」を「ニザリケル」と詠み又は「ユク」の上  
 字を増して「イ行キ」と詠むの類と髣髴たること、考へて  
 可なり韻文には韻脚の都合の爲め之を用ふることも散  
 より多き道理あり  
 第二類 言語を省き若くは加ふるもの及び言語の順序  
 を變更せるもの即ち意味上に於て必要あるものを省く  
 も文理上に於て妨げなきものを省くもの及び文理上及

意味上に於て必要なきも語勢の爲めに之を加ふるもの  
 及び普通に用ふる順序を變更して意味を害せざる限り  
 に於て之を前後倒置するもの等を云ふ近く譬へば日本  
 語にても芳野の櫻と嵐山の櫻と孰れか勝ると云は、實  
 は芳野の櫻と嵐山の櫻と孰れが勝ると云ふべき所なれど  
 も下の櫻は之を略するも妨げなき故之を略せしかり又  
 譬へば「相飲まん酒ぞ此豊御酒は」と云ひ又は「賤や賤が  
 緒環、くりかへし」(静姫謠)所に據ると云ふは上の酒及  
 び上の二賤は之れなきも文理及意味に於て更に異なる  
 所なきも語勢の爲に加へしかり又譬へば「行くことを得  
 ず」を「得行かず」と云ひ「我はいぬめり」とあるが正式なるも  
 「いぬめり我は」とも云ひ得るあり第二類は即ち此れと略

相似たること、知るべし  
 第三類は文に精彩を付する工夫に屬するもの即ち各種  
 の比喩的言語を以て形容し又は表面を云ひて裏面を意  
 味し或は無形物を有形物と見做し若しくは人類に非ら  
 ざるもの人を類視して之に談話をなさしむるの類を云  
 ふ例へば隻手六十餘州を掌握すと云ひ恩澤に露ふと云  
 ひ霞の衣と云ふの類は皆比喩言にして比喩にも種々あ  
 りて長きは通篇皆比喩あるあり例へばブンヤン氏の天  
 路歷程の如き近くは東海散史の東海之佳人の如き是れ  
 なり又譬へば郭公を呼んで汝がと云ひ織女をして牽牛  
 を恨ましむるの類亦此類に屬す其他此第三類に屬する  
 言語の種類は甚だ多けれども今は省て言はず

以上は専ら英語に付て言ふと雖ども予が知る所の其他の  
 歐洲語に於ても概ね皆其趣を同じくす  
 右に述ふる所の言語の變體は散文に於ても之を用ひざる  
 にあらずるも詩賦に於ては最も多く之を用ふ隨て純粹の  
 詩は一面には韻語を用ふると他の一面には其用ふる所の  
 言語が通例の散文より變體のもの多きとの二つの特質を  
 具へたるものを指すと知るべし而して散文中にても小説  
 の如きは元來想像に基きて作り文章も華美にして而して  
 變體の言語を用ふることも他の散文より多く此等の點に  
 於て詩賦と頗る相似たる所あるの故を以て韻語の一特色  
 を欠くに拘らず詩の字の廣義に據り之を一種の詩と稱せ  
 るならん加之近世にては西洋にても「エピック」(説話的長

篇の詩)を作るの風漸く衰へ小説は益々盛にして恰も之に  
 代れる如き姿あれば此事實も亦幾分か参考とすること  
 得べし但し東洋の語學に於て嚴正に云ふときは詩と云ひ  
 歌と云ひ又賦と云ふの類は平仄を爲し又は押韻し若くは  
 之れと類似の方法に依り吟詠し得らる、性質を具へたる  
 ものを指すと知るべし

(第九問)新體詩てふものには形式の統一ありし形式なきが  
 故に新體の二字を冠するものか

(答)新體の二字は在來の和歌の体裁を離れて一種の詩體を  
 案出せる爲めに命名せしものあるべし形式なきが故とは  
 認め難し但新體詩は今猶創業の境界を離れず西洋の詩體  
 杯を見て様々に工夫を凝らし居るもの、如し是れ其形式

の種々なる所以あるべし即ち貴説の所謂統一あるものなるべし其様々の工夫が果して大成の功を奏するや否やは別問題なれども新體詩の形式は決して貴説に謂ふ如き意味合の統一とか一定とか云ふことを見ざるべし何となれば在來の和歌の如く區々たる小形式を以て一定の標準とし變化の餘地なきものは膠柱守株の惡模範たるべければかり

(第十問) 從來の長歌と新體詩との優劣

(答) 本問は予が答辨を好まざる事柄なれども折角の懇望なれば一通り答へ申さん本問は兩様の趣旨を含めりと解せざるべからず第一には長歌と新體詩との形式の優劣、第二には兩者の詞藻の成迹の優劣是れあり

(第一) 形式に付ては從來の長歌は實に單純極まりたるもの

にて五言七言を隔句に交錯し稀に長短句を交へ全篇の長短には制限なく而して餘意の如何に因り反歌を附し若くは附せざるまでのみ新體詩にありては種々の工夫を凝し居ると前に言ひし如し若し歌唱音曲の實用に供せんとし又は從來の長歌よりも幾層倍ある長篇を作る如き場合にば從來の長歌の形式は陳腐に屬するの恐れあり何となれば長歌を清元あとの如き俗曲流に謠はしむるの工夫に作るならばいざ知らず(夫にして)西洋流の音曲に合はせんとするに一式のみにては如何し(西洋流の音曲に合はせんとするに)は段解の區別あは必要あるべく又長篇大作に在りては段解の區別なく徒に長きのみにては姿態の妙を失ふのみ

からず實は接續照應の工夫も漠然に陥ることあるべし之  
に比すれば新體詩の形式は方今未だ化育中に在りとする  
も後來有望ありと云ふべし若し山上憶良の片手を有する  
作家をして今日に出しめば在來の長歌風の作歌にても必  
ず見るべきの名工夫を案出するからんも當今の作家の腕  
前にては其成功如何あらん左れば若し長歌を再興せんと  
欲せば餘りに新工夫するを要せず冠辭掛辭の濫用を慎み  
軟弱冗長の言語を徒らに長く排列することを避け奇崛難  
解の古言を遠ざけ而して篇の長きものは憶良が貧窮問答  
を二段に分ちたる故智に倣ひ適宜に段解を設くる位の處  
にても手腕次第にては相應の佳作を得らるべし唯斯るこ  
とを試むる作家ありや無しやは予の知る所に非らず

(第二)詞藻の成迹に付ては予は嘗て萬葉時代の發達を稱揚  
したり各國の言語相同じからず而して詩歌の最妙所は概  
ね言語の湊合如何に在るが故に各國の詩歌自ら其の特長  
の所ありて他國語の決して及ぶべからざるものあり隨て  
鶯は鶴喉を學ぶ能はず鶴は鶯簧を學ぶ能はざると均しく  
和漢洋の詩歌皆互に特長あることは論あきも若し至斑を  
一括して之を評するときは遺憾ながら洋詩を以て最も發  
達せるものとし支那詩之に次ぎ和歌之に次ぐと言はざる  
を得ず乍去從來の長歌は兎にも角にも言語の用法も雅俗  
の標準も自ら一定する所あり之に反し予が往々一讀した  
る所の新體詩は災害後の村民が老若打集ひ俄かに空地に  
小屋掛したる如き状況にて諸事甚だ燕雜亂脈にして言語



も揃はず文法も協はず形式も己すから何の根據も亦く勝  
 手に長短錯綜し果ては韻文か散文か假字交りの漢文か田  
 舎宗匠の和文かだも分つべからざる如きものあるの現狀  
 あるが如し故に現在の成迹に付ては新體詩は從來の長歌  
 と日を同じくして語ることを得べきものにあらざると信ず  
 是も將來の如何を考ふれば新體詩に在りては之を作る者  
 多くは智識を世界に求むるの便を有するを以つて新思想  
 の注入多く隨て材料に富めるが故に將來研磨の久しき或  
 は意外に好成迹を収むるかも知るべからず此の點に附て  
 は新體詩は却て有望ありと云ふべきなり且つ前年の日清  
 戦争に付ては詩歌の材料少からず宜く名篇大作を以て一  
 世を鼓動するものあるべきなり然るに英人アルノルド氏

の英語にて作れる白神源次郎及び申すも畏く且つ純粹の  
 和歌には非ざれども恐きあたりの御筆に成れる成歡驛平  
 壤城の二篇ありて出色の姿態を示すの外は専門の歌人輩  
 とて大山大將の金州植櫻の小詠に顔色を失ふ位にして何  
 一つ見るべきの名吟を出だせる者なきの時に當り新體詩  
 界のみは續く諸種の吟詠を試み往々軍陣鼓勇の實功をも  
 奏したるものあり是れ從來の長歌にして心あらば老驥と  
 俱に櫪中に痛歎健羨する所なるべし  
 丁酉三月下浣起稿於月瀨吟香館了於湖上竹清樓

かくまてに、なかうらんどは、思はあくて、  
 うかゝ筆を、どりにけるかき、 阿ゝ、

(完)

答松永松齡君

君は歌學に熱心なる老先生と察せらる予の國歌論に  
付き今朝數條の詰問を郵致せるに外神田とのみにて  
宿所分明ならず且答案は讀賣新聞社に投せんことを  
懇望せらるゝに付き敢て讀賣記者に請ひ其餘白を假  
り左に一々之を答辯す  
一、浦島子歌中「墻もかく」云々は本文に墻毛無家滅目八跡と  
あり校異萬葉和歌集には「カキモナク、イヘモウセメヤト  
と傍訓せるも萬葉略解の傍訓には「イヘ」の下に「モ」の字無  
し是れ寧ろ本文に適へり又「家地云々」は本文に「家地見」と  
ありて校異本には「イヘドコロミム」と訓せるも略解本に

は「イヘドコロミユ」と訓せり又校異本には「永世爾」を「ナガ  
キヨニ」と訓せるも略解本には「トコシヘニ」と訓せり予は  
時として校異本に據りしも多くは略解本に據りたり  
意ふに萬葉は元來所謂萬葉假名の本文のみなりしを後  
に碩學の傍訓せしものあれば傍訓に數種あるは松永君  
も之を知るからん故に自家見る所の書に如此ありとて  
直ちに他を誤謬とすべからずと知らるべし  
一、近江荒都の歌中大和の冠辭ある「空に見つ」のことは委し  
く眞淵の冠辭考に見ゆ是は元來「ソラミツ」にて他所にて  
は本文に多く蘇良美都或は「虛見津又は虛見通」と書し神  
武紀にも虛見日本國と記せる所あり然れども此荒都の  
歌中には本文に「天爾滿」と書せり略解本の註には「ソラニ

ミツは例に違へりソラミツの方まされりと論せるも冠  
辭考には

かくて上つ世にはそらみつと四言にいひたるを人萬  
呂に至りてそらに見つと五言にはよまれし、されど其  
後にも猶四言によみたるもあり、その人萬呂の歌の満  
の字は借たるにて見つてふ意也

と論せり故に予の發意にて故さらに古語を變じたるに  
非らずと知らるべし

一、和歌とは萬葉にては唱和の意ありと聞く猶漢詩の和韻  
の如し一切の歌を和歌と云ふに非らざるべしとの高論

一應の理なきに非らざるも予は古今和歌集の序文の冒  
頭の「ヤマトウタ」と云へると同意味に用ひたり猶和服和

製と云ふの類のみ古來此意に用ふること少らず或は國  
歌と稱するもあり要するに唱和の意の和歌は狹義に或  
る格段ある場合に付て云へるものと解して可ならん乎  
地名として五畿内の大和を指す時と廣く日本國を指  
す時との二つあると同じと解せられたし

一、反歌短歌のことは貴説には反は只音便を假りたるまで  
にて即ち短歌と云ふに同じかるべし或二大家の説亦然

りとのことあり或は然らん然れども或大家の歌學書に  
世人反歌は即ち短歌と心得尋常の短歌に反歌一首と題

する類の人あるは誤れり反歌は長歌の後に付し其意を  
反復し又は餘意を述べたるものを云ふありとのことを  
論せるを見たることあり今は何人の著書なりしや其出

處を搜索するに遑あらざるも予は寧ろ此説に従はんとす

一、鄙稿中傍訓は極肝腎のもの若干を除く外他人の施せしものなれば其人の誤もあるべく補字の誤もあるべし併し君が特に問はるゝ悲世間難住歌中乙女の傍訓を「ヲトメ」とせるは「ヲ」は萬葉假名「遠」なれば「ナ」にて誤りなし

一、菟原處女墓歌中の片生の傍訓を「カタオヒ」とせるは校異本に右の如くあればあり但略解本には貴説の如く「カタナリ」とあり予は意ありて故さらに「カタオヒ」を取りしにはあらず寧ろ偶然如斯せしまであれども而も未だ之を誤謬と認むる程の理由を見ず

一、第六回に引用せる無名氏の古挽歌の下に「是は純然たる

戀歌にあらざるも亦其類に外ならずと知るべし」と註せるを總ての挽歌を戀歌の類とせしものとせられ大に怪まれ楠公權助を同視するの類にあらずやと言はるゝも予は只右に引用せる挽歌に付てのみ特に右の如く云ひしのみ是れ右の挽歌は意中の女を追傷して相愛の情を叙せるものにて通常の戀歌とは生前死後の差こそあれ均しく戀愛の情を述べものあれば姑く之を戀歌の一種と見るも予の立論の趣旨に於て妨ぐる所をければあり

一、貧窮問答中の「ナガヨハワタル」の「ナガヨ」は方今流行の或る有力家の歌學書中にも「ナガ夜」と譯出せるも今案するに萬葉本文に「汝代」とあれば「汝が世」の意に従ふべき乎是

れのみは予の粗忽と想せられたし

三月六日夜稿

○  
 前文中に引く所の反歌短歌の論は春海の歌かたり中  
 に見ゆ守部の長歌選格には音曲の上より着目して反  
 歌とは神樂催馬樂の反物の歌と同じく音節を反復す  
 るの意あることを論せり是亦詞章に付て餘意を反復  
 すと云ふと同論旨に歸すと知るべし

青萍追識

○再答松永松齡氏

末松青萍

一 浦島子の長歌の結語の家地見は上文に墨吉爾還來而家見  
 跡家裳見金手里見跡里毛見金手云々とあるに對照すれ  
 ば家地見とは言ひ難からんとの貴論は家地の見ゆべき  
 理なし因て見んと訓すべしとの意なるべし是れ一應の  
 理ある如きも余は矢張見ゆの方勝れりと思ふ何とあれ  
 ば上文は浦島子歸來の當時の情況を叙せしものにて結  
 文は右に云ふ如き經歷の浦島子が嘗て住し居りたりと  
 稱する墨江の海濱が見ゆるわいと云ふ意に過ぎずして  
 上文と抵觸する所なきのみならず遊覽叙景の詩として  
 は「見ん」の期望言よりは「見ゆ」の直叙言の方文勢活動

して趣味あればなり氏は又た萬葉略解の誤謬少からざ  
 ることを説く或は然らん然れども予は萬葉學者を以て  
 自ら任ずる者に非らず而して略解の著は千蔭春海等の  
 有力家の協力に成りたるれば予は輕々に氏と共に其  
 月旦を定むるの勇氣を有せざるを但予の最前の論文  
 に引用せる萬葉長歌中には予の嗜好に任せ略解本の傍  
 訓を舍き校異本に據りたるもの若干あるのみ  
 一、空見つゝの冠辭に關し氏は冠辭考の人丸に至りて五言に  
 詠せし云々の論には大に服し難し云々と説く氏の服せ  
 ざるは氏の隨意なり唯人丸の近江廢都の長歌には校異  
 本にも略解本にも本文に天爾滿そらにみつと明記せる  
 は動かすべからざる事實なり

一、和歌のこの萬葉には何某奉和歌又は何某和歌など、あ  
 るが例にて其前には必らず他人の作歌あり隨て此場合  
 に於ては日本書紀中に何某答歌曰「姫和唱曰」又は「或存和  
 曰」とあると均しく唱和の意なること勿論なり故に略解  
 にも「此集すべて和歌と有はこたへ歌也」と註せり供し予  
 は他に據る所ありて最前の論文中に於て和歌の名稱を  
 日本國固有の詠歌と云ふ意に用たり是れ何等の支障か  
 あらん氏は曰く古今の序にやまど歌はとあるは文章の  
 語にて突然歌はとも書初めがたければ斯くは書れしか  
 らんか千早振神代にはとあるも又同じからんと或は然  
 らん併し古今集の眞名序の冒頭にも夫和歌者とあり古  
 今集の題名も其全文を擧ぐれば古今和歌集あり其以前

仁明天皇嘉祥二年興福寺大法師等が聖像四十驅に添へて献せし長歌の序言中にも「夫倭歌」の語見ゆ其他枚舉に違わらず

一「をとめ」は何處までも「をとめ」あり萬葉體にては萬葉假名の場合は遠登賣或は遠等咩等の字を用ひ本字の場合は小女、處女、未通女等の字を用ふるは氏の知る所なり乙女は假字のみ併し世多く之を用ふるより予も便宜の爲め此字を以て譯出せしのみ乙の訓は「おと」あるも之れが爲め「をとめ」を「おとめ」とすべきに非らず氏は萬葉四の紀女郎の歌中の「世間之女爾思云々」の女の字に「おとめ」と傍訓せる如く引例せらるゝも是れは「をとめ」の誤筆あるべし校異本には「をとめ」と訓せり但略解本には「をみみ」と訓せ

り

一、萬葉第一中幸紀伊温泉之時額田王作歌のことは予の前論に關係あき突然の質問あるが此歌の正訓は壽永の古既に其傳を失ひ元曆校本に其傍訓を缺き契沖眞淵宣長千蔭春海等の碩學を以て之を考究するも之を得ず其得たる所は纔に諸種の異本を取舎折衷したる臆測に過ぎず蓋し本文に誤字多きが爲めなり要するに今日に於て其正訓を得ることは難かるべく予も亦定説を有せざるなり  
以上は松齡翁が其居所をも明にせずして切に予の再答を讀賣紙上に投せんことを求めらるゝにより不本意ながら再び讀賣記者を煩はし茲に之を答ふ意ふに翁が果して如

何ある人なるかは予之を知らずと雖ども其の萬葉學に熟  
心なる知名の士にして故さらに其眞姓名を祕せるものに  
似たり因て其熱心に對して此答を爲すも予は歌人にあら  
ず又語學者に非らざれば今後此等の細論は寧ろ之を其道  
の得意家に謀られんことを希ふ

○末松青萍博士に質す

與謝野寛

謹で一書を致し、敢て明晰なる御答に接せむことを望むも  
のほ他なし新年初刊の太陽に於て博士が謂ゆる、現今陥々  
たる和歌者流の傾向は余が大に彼等のために慨歎する所  
なりとせらるゝ一節の評論に遭逢せることは是あり  
博士は自ら余は和歌を能くせずと雖も詩情歌情の如何は  
略ぼ之を解するものありと稱し、さて和歌社會の傾向を説  
て、(一)に和歌社會亦舊觀を留めず、遂に懦弱優柔の風に陥り  
たるは、文學界のため頗る惜むべき事とすといはれ、(二)に、  
「余を以て之を見れば、和歌者流の技倆は明治照代に至て益  
々衰態の状を呈したりと云はざるを得ず」とて、



近時、香川景樹の遺風を慕ひ、彫琢刻苦を忌み、自然の發韻を尊ぶと稱する一  
 種の和歌風世に出たり。其論一面より云へば聞くべき所なきにあらざる  
 も、又一面より言へば頗る偏僻に陥りたる觀なきにあらざる。蓋し詩歌と稱る  
 ものは散文と異り、事實を事實として露骨に書き述ぶるは既に其本領にあ  
 らず。必ずや詩歌は詩歌に適する一種の思想及文字の用法あるべきなり。然  
 るを單に平易を尊び、叙述を重んずと云ふのみを旨とするが故に、遂に所謂  
 詩歌の眞價を損じ、散文を作るに異らざるなきに至れり。甚しきは俗極卑極  
 の、惡韻文を見るの傾向を生せむとす。

と。の高教を垂れられ、終に臨んで今にして考一考せずんば  
 終に道戯歌甚しきは狂歌柳樽の類に陥つて止まんすとす  
 断せられたり。以上の語たる、現今の和歌者流を警醒せむと  
 の、厚意に出でたるに相違をかるべし。雖その評騭の誣妄  
 も甚しきより見れば、小生は、小生等現今和歌者流の頭上に

向つて、明に一大侮辱を加へられたるものなりと云ふに、躊躇せざらむとす  
 小生は爰に十餘年間を和歌のため、苦めるもの、顧ふに和歌  
 界の消息を知れること、は、多能博聞ある博士より、勝る  
 どころあらむか。この三四年以來、我國の文壇に於ける和歌  
 者流の傾向は、未だ曾て博士の評騭のごとく、甚しきものあ  
 るを見ざる也。少く博士の語に就いて辯せむに、  
 (一)和歌社會亦舊觀を留めず、遂に懦弱優柔の風に陥り、と云  
 はれたるは、乃ち侮辱の一なり。小生等が述作、或は之を明治  
 以前の和歌に比し、進歩の跡に乏しきものあらむも、未だ  
 以前の和歌に比し、如きも、懦弱優柔の風に至るは、既に和歌壇  
 は、彼に比して、劣るが如きも、懦弱優柔の風に至るは、既に和歌壇  
 は何たるに、誣妄の語ぞや、懦弱優柔の風に至るは、既に和歌壇

上。の。競。争。に。死。滅。せ。る。一。部。の。舊。歌。人。高。崎。清。風。氏。等。の。宮。内。省。  
 派。と。呼。ば。れ。し。人。々。及。び。鈴。木。重。嶺。氏。等。の。俚。俗。に。宗。匠。と。呼。ば。  
 る。人。々。に。於。て。曾。て。一。た。び。此。弊。あ。り。し。と。雖。現。今。の。和。歌。  
 壇。上。ま。た。一。人。の。手。弱。女。ふ。り。主。張。者。あ。る。を。見。ざ。る。な。り。佐。々。  
 木。信。綱。氏。の。如。き。は。近。く。三。年。前。に。あ。り。て。小。生。が。儒。弱。優。柔。派。  
 の。一。人。に。數。へ。た。る。人。な。り。し。が。今。や。翻。然。自。ら。悟。ら。れ。た。る。所。  
 あり。落。合。直。文。海。上。胤。平。二。氏。の。如。き。は。由。來。雄。壯。快。活。あ。る。歌。  
 風。を。以。て。世。に。知。ら。れ。た。る。人。に。あ。ら。ず。や。  
 (二)次。に。景。樹。の。遺。風。を。慕。ひ。彫。琢。刻。苦。を。忌。み。云。々。と。言。は。れ。た。  
 る。も。現。今。の。和。歌。壇。上。小。生。は。じ。め。各。々。自。我。の。見。地。に。立。つ。景。  
 樹。の。遺。風。を。慕。ふ。鼻。屈。兒。も。な。け。れ。ば。眞。淵。を。祖。述。せ。む。と。す。る。  
 小。量。漢。も。あ。し。落。合。氏。は。眞。淵。も。景。樹。も。共。に。不。具。の。歌。人。あ。り。

と。す。る。人。に。し。て。海。上。氏。は。古。今。萬。葉。の。歌。を。も。不。完。全。あ。り。と。  
 し。手。づ。か。ら。人。丸。赤。人。の。歌。集。を。も。削。正。せ。む。と。す。る。人。あ。り。佐。  
 々。木。信。綱。中。村。秋。香。二。氏。の。如。き。は。古。歌。の。精。を。と。り。洋。詩。の。粹。  
 を。扱。き。こ。れ。に。自。家。の。特。能。を。加。味。し。て。一。個。の。新。調。を。創。せ。む。  
 と。せ。ら。る。も。の。如。く。小。生。も。亦。曾。て。小。生。の。詩。は。誰。を。崇。拜。  
 す。る。に。も。あ。ら。ず。誰。の。糟。粕。を。嘗。む。る。も。の。に。も。非。ず。小。生。の。詩。  
 は。即。ち。小。生。の。詩。に。御。座。候。ふ。と。公。言。せ。る。こ。と。あ。る。も。の。也。  
 (三)次。に。必。や。詩。歌。は。詩。歌。に。適。す。る。一。種。の。思。想。及。文。字。の。用。法。  
 あ。る。べ。き。か。り。と。て。小。生。等。現。今。の。歌。人。は。文。字。の。用。法。に。知。  
 ら。ざ。る。が。如。く。に。云。は。れ。た。り。こ。は。餘。り。に。小。生。等。を。侮。辱。し。給。  
 へ。ら。る。も。の。に。あ。ら。ず。や。現。今。の。和。歌。壇。に。立。つ。も。の。誰。か。詩。想。の  
 撰。釋。歌。語。の。安。排。に。經。營。刻。苦。を。費。さ。さ。る。者。あ。ら。む。そ。の。苦。心。

の割合に比して佳作なきは蓋して手の低きが爲のみ。技能の  
足らざるが爲のみ。されはとて遂に所謂詩歌の眞價を損じ、  
散文を作る。と異らざるに至れり。と云はれ、甚しきは俗極卑  
極の悪韻文を見る。と云はる。程の悪作に至ては、比較上、尠  
少あり。と云ふを彈らず。博士もし疑はば現今の和歌壇上、先  
づ佐々木信綱氏の歌を見よ。氏が一兩年間の進境頗る明著  
あるものあるは、遍く世の評家は苛酷と云ふ。より、誣妄といふ  
之を要するに、博士の評言は苛酷と云ふ。より、誣妄といふ  
かた當れり。恐らくは博士は、この五六年間に於ける和歌界  
の傾向を知らざるものか。然らずんば、博士は漫りに誣妄の  
言を構へて、小生等現今の歌人を侮辱したる者と云はざる  
可らず。敢て問ふ。博士は二者の孰れに居れるものぞ。

現今の和歌を以つて、亦た舊觀を留めず、と云ひ、俗極卑極の悪韻文と  
云ひ、益々衰態の状を呈したり。と云ひ、俗極卑極の悪韻文と  
云ひ、終に道戯歌、狂歌、柳樽の類に陥つて止まむ。といはれた  
る。數語の如きは、博士に於て正當なる辯明なき限は、文壇の  
徳義上は、た博士たるべき人の品位上、まさしに博士に向つて、  
その取消を請求すべき。誣妄の語なり。と信す。作家が評家に  
反抗するは、嘉すべき習慣に非ず。と雖も、近時の文壇には、癖  
のわるき評家ありて、我が心得ぬ。とに、まで、かう悪口申  
さる。いが小面憎く、夫に、一々おん方に、ウルサシと思へる  
折柄、博士の如き多能博聞あるおん方に、して、猶これらの間  
違あるが片腹いたく、他の同人は皆おん方に、して、猶これらの間  
敵役にありて、敢て愛に一言を進むるものあり。左の短歌十

首は、小生の新著「天地玄黄」より抜き出でたるもの、博士の謂  
 ゆる、懦弱優柔、詩歌の眞價を損じて散文と異ならず、俗極卑  
 極の悪韻文たる痕跡あらば、乞ふ指摘の上、示教を吝給ふ  
 勿れ。走卒に筆を採り文に禮を缺く多罪万謝。

○短歌十種

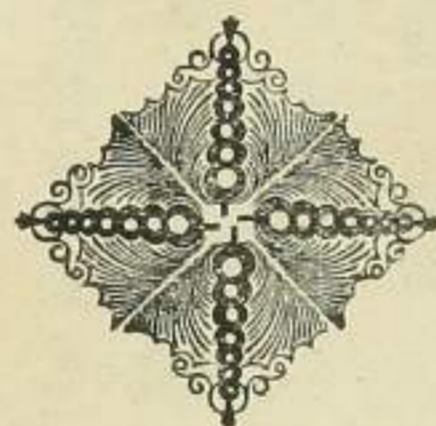
鐵 幹

露あがら、折る袖にさへ、すがるかあ、  
 蝶もや惜む、やまぶきの花。  
 くもりあき、鏡の上、あやにしき、  
 着せたるほどの、心ともがな。  
 立ちぬれし、花のまづくの、こゝちして、  
 朝日にとくる、松の雪かあ。

戀ひわびて、消えにし誰の、かたみぞや、  
 露けき野邊の、まつ虫のこゑ。  
 あはれその、恨みもいはで、世を去りし、  
 むかしの人を、われは歌はむ。  
 ぬるまだに、みださじとする、黒髪の、  
 ひとつほつれて、物思ふかな。  
 わが船の、けぶりの末に、星みわた、  
 夕汐たかし、天草の灘。  
 桐の葉の、ひとつちり浮く、山の井に、  
 月のかげくむ、朝ぼらけかな。  
 もりすて、朽ちし、門田の、あるこゑは、  
 春ひくいとは、柳あけり。

鼎かまへをも、あぐべきちから、ありながら、  
とる筆ふでのみは、重おもくもあるかき。

(完)



明治三十年五月二十三日印刷  
全三十年五月二十六日發行

定價金四拾錢

著 作者

東京市芝區芝公園五號地

末 松 謙 澄

發 行者

東京市本郷區本郷六丁目五番地

高 頭 忠 造

印 刷 者

同 京橋區京橋水谷町七番地

高 橋 友 吉

印 刷 所

同 京橋區京橋水谷町七番地

日 進 舍

發 行 所

同 本郷區本郷六丁目五番地

哲 學 書 院



西村茂樹先生著

德學講義

第四卷 近刊

文學博士 井上哲次郎先生著

釋迦種族論

四六版上等紙美本  
全一冊 近刊

文學士 建部遜吾先生著

陸象山

菊判上等紙美本  
全一冊 近刊

1772

法科大學 花岡金藏君著

死

全一册 近刊

二

林學博士 中村彌六君校閱  
林學士 和田國次郎先生著

森林學

全一册 上製 定價九拾五錢

前製定價八拾錢 郵稅八錢

再版近日出來

イセニキ